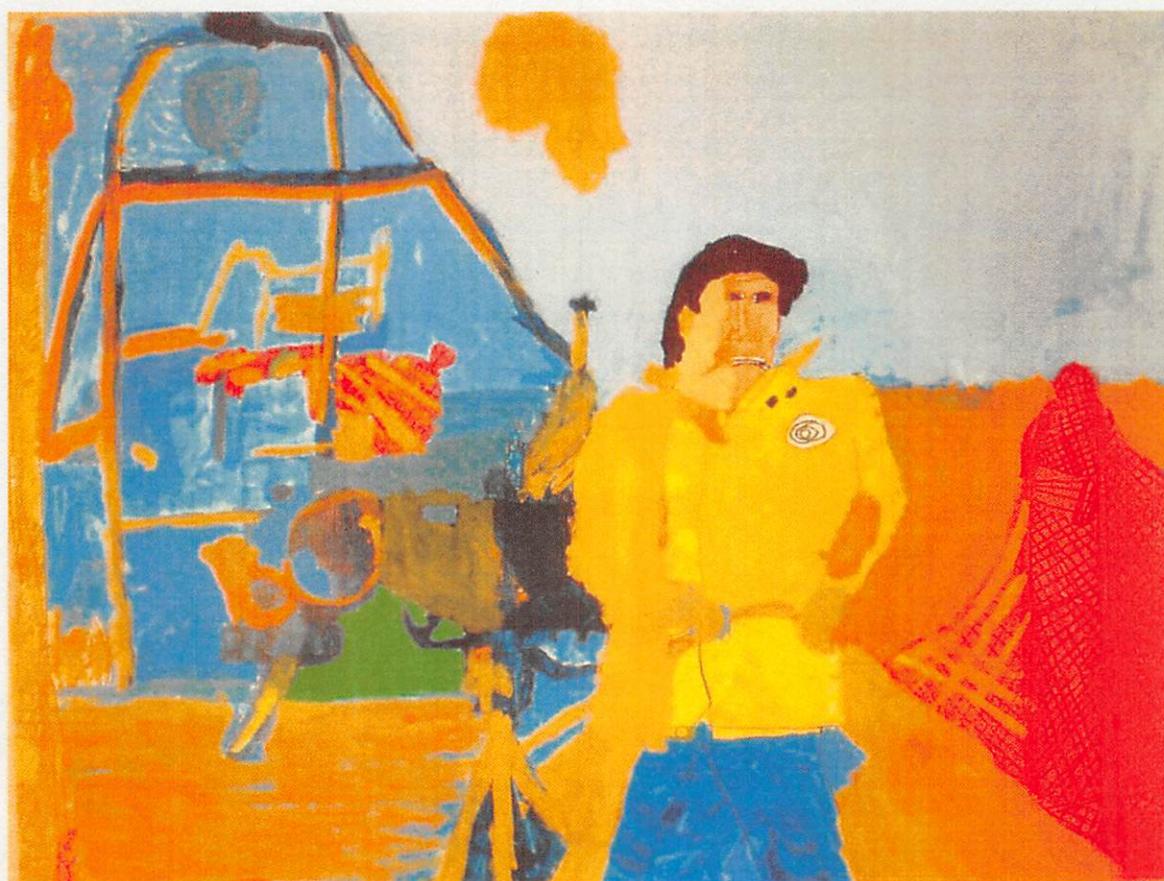


# 研究紀要

第18号

確かな学力，コミュニケーション力定着のための授業づくり



平成30年3月

鹿児島県立鹿児島聾学校

※ 表紙絵 第22回全国聾学校絵画展 優秀賞  
受賞作品（本校中学部1年生徒）『漁師』

# 目 次

はじめに	1 P
I 研究の概要	2 P
II 幼稚部の研究	5 P
III 小学部の研究	20 P
IV 中学部の研究	53 P
V 高等部の研究	69 P
VI 寄宿舍の研究	122 P

## はじめに

本校の校訓は、「よく話し ことばで考える 豊かな子」です。「ことばで考える」というところが、とても大切だと思っています。物事を理解するとき、「知っているけど、なぜなのか意味や理由は分からない」というときと、「知っているし、意味や理由も分かる」というときがあります。意味や理由が分かっていたほうが、しっかりとした理解につながることは明らかです。しかし、これからの時代は意味が分かるだけでなく、「その意味や理由を自分の頭でしっかりと考えたり、体験したりすることでさらに深いところまで理解する」ということが大切になってくるのではないのでしょうか。

そういうことを考えると、本校の幼児児童生徒にとっての「ことばで考える」ということがさらに大切にしていくべきものだということが分かります。私たちは、考えや気持ちを相手に伝えるときや頭の中で考えるときに「ことば」を使います。また、自分の気持ちや行動、感情やストレスを調整するときにも、「ことば」を使っています。ことばを発していなくても、深いところで思考するとき「ことば」は大切な役割を担っています。聴覚障害の子供たちにとって、「ことばで考える」ことは、まさに学びそのものだと思います。

平成27年度から本年度まで、「確かな学力、コミュニケーション力定着のための授業づくり」というテーマで、4学部と寄宿舎において発達段階や特性に応じたテーマを設定し、研究を進めて参りました。幼稚部においては「伝えたいと思える保育環境を整備し、コミュニケーション力の向上を図る試み」を、小学部においては「ICT機器など視覚情報を有効に取り入れた授業を展開する試み」を、中学部においては「授業における発問、板書、ノートなど基本的な指導技術に着目」し、高等部においては「各教科で評価基準と判断基準を設定し、学力、コミュニケーション力、論理的思考力の向上を目指した授業実践」を展開してきました。また、寄宿舎においては「生活指導を中心においてコミュニケーション力の向上を目指した試み」について研究してきました。

最終年度に当たる本年度には、九州地区聴覚障害教育研究会鹿児島大会を主管し、同日授業力向上プログラムにおける公開授業も行い、県内外の多くの先生方に本校の研究や研究に基づく授業を見ていただくことができました。「一定の力がついた子供には、さらに自分で考えさせる手立てを」という助言もいただきました。

学習指導要領が改訂され、より現代的な課題についての解決力が求められています。聴覚障害教育を取り巻く現状もしっかりと把握し、これからの教育の目指す方向性を共有しながら、さらに職員も深く考え、学んでいくことが本校の課題と言えます。

皆様方には、本紀要を御高覧いただき忌憚のない御意見や御批正を賜りますとともに、今後とも本校の研究への御指導・御助言をくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成30年3月

校長 本庄 美千代

# Ⅰ 研究の概要

## 1 研究テーマ

確かな学力，コミュニケーション力定着のための授業づくり

## 2 研究テーマ設定理由

平成24～26年度の学校研究テーマを「学力向上を目指した取組」とし研究を進めてきた。各発達段階での学力の捉え方をまとめ、学力向上を図るための具体的方策を実践してきた。研究を通して、幼児児童生徒に自ら学びたいという意欲を持たせるような授業を行ったり、言語環境を整えたり、学級、家庭、寄宿舎、各教科担任と相互連携を深めたりしていくこと、幼児児童生徒の実態把握を的確に行い日々実践を積み重ねていくことが大切であり、より効果的な指導方法を明らかにしながら教師の授業力を高め、全職員が共通理解・実践をしていく必要があることが分かった。

また、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」が出され県内唯一の聾学校として、聴覚障害児への合理的配慮の提供や基礎的環境整備に率先して検討していく必要があると考える。そして、鹿児島県特別支援学校の授業力向上プログラムに基づき、授業におけるPDCAサイクルの機能化についても検討を重ねていきたい。さらに、保護者や社会からは、社会生活を送る上で必要な学力・コミュニケーション手段の獲得を目指してほしいとのニーズがある。

そこで、平成27年度～29年度の研究については、「確かな学力，コミュニケーション力定着のための授業づくり」と設定し、研究を進める。

## 3 研究目的

幼稚部・小学部・中学部・高等部・寄宿舎で一貫性のある学校づくりを目指すためにも研究テーマを一本化し、具体的な取組について、各学部で実践・検討を重ね、研究に取り組むようにした。各学部の研究テーマについては以下のとおりである。

幼稚部：コミュニケーション力の向上を図る保育活動  
小学部：「分かる授業づくり」のためのICT活用  
中学部：授業における基本的指導技術  
高等部：教科の特性に応じた指導・支援方法の工夫  
寄宿舎：コミュニケーション力を育む生活指導

幼稚部については、特に乳幼児～幼稚部時期はコミュニケーション力の基礎となる大切な時期であり、その力を向上させるために教育課程（年間指導計画）の見直しを行ったり、幼児や保護者への関わり方、言葉・教材の提示の仕方（指導法に関すること）をまとめたりして研修を進める。

小学部については、現在本校にあるタブレット、見える校内放送、電子黒板など ICT 機器の活用方法を検討し、児童にとって分かりやすく達成感のある「分かる授業」をめざして実践・検討していく。

中学部については、各教科等での授業における実践を基に、基本的な指導技術についての研究とまとめ及び共通理解を図ることによって、より確かな学力とコミュニケーション力定着のための授業づくりに取り組んでいく。

高等部については、教科の特性に応じた指導・支援方法の工夫の具体策として、生徒の実態に応じた評価規準の設定と言語活動の充実に取り組んでいく。

寄宿舎については、寄宿舎の生活の中でコミュニケーションを取り合う場（挨拶・返事、ミーティング、月例会）を活用し、コミュニケーション力を高め、定着させることを検討していく。

#### 4 研究内容・方法

3か年計画で各学部でテーマに基づいて研修を進める。

- ・平成27年度 4月～8月：理論研究・共通理解  
9月～1月：実践  
2月～3月：1年次まとめ
- ・平成28年度 4月～1月：実践・検証  
2月～3月：2年次まとめ
- ・平成29年度 4月～9月：実践・検証，研究のまとめ

10月：九州地区聴覚障害教育研究大会（鹿児島大会）（10/26-27）

県特別支援学校授業力向上研究会（10/26）

11月～1月：九聴研まとめ，研究のまとめ，研究紀要作成

2月～3月：来年度のテーマ研修の検討

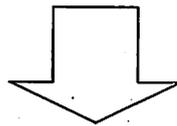
## 【研究テーマに関する構造】

### 1 平成24～26年度の研究テーマ

3年間の学校研究テーマを「学力向上を目指した取組」とし、各学部の具体的な取組を副題に設定して研究を進めてきた。各発達段階での学力の捉え方をまとめ、学力向上を図るための具体的方策を実践してきた。

幼児児童生徒に自ら学びたいという意欲を持たせるような授業を行ったり、言語環境を整えたり、学級、家庭、寄宿舎、各教科担任と相互連携を深めたりしていくことが大切であると分かった。

幼児児童生徒の実態把握を的確に行い日々実践を積み重ねていくことが大切であり、より効果的な指導方法を明らかにしながら教師の授業力を高め、全職員が共通理解・実践していく必要がある。



### 2 平成27年度からの研究テーマ

【過去の研究の成果と課題】	【特別支援教育の動向】	【県特別支援学校の 実践課題】	【保護者や社会の ニーズ】	【全 日 聾 研】
<ul style="list-style-type: none"> <li>・確かな日本語力の育成のための研究の指導実践 (H18～20年度)</li> <li>・「個別の指導計画」の検討 (H21～23年度)</li> <li>・学力向上を目指した研究の指導実践 (H24～26年度)</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 確かな学力, 学力の向上・定着</li> <li>* 授業力向上</li> </ul> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」</li> <li>・聴覚障害児への合理的配慮の提供</li> <li>・基礎的環境整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・県授業力向上プログラムに基づく各校でのPDCAサイクル, による授業改善の取組</li> <li>・分かる授業</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会生活を送る上で必要な学力・コミュニケーション手段の獲得</li> </ul>	【九 聾 研】

研究テーマ：確かな学力，コミュニケーション力定着のための授業づくり

幼稚部：コミュニケーション力の向上を図る保育活動  
 小学部：「分かる授業づくり」のためのICT機器の活用  
 中学部：授業における基本的指導技術  
 高等部：教科の特性に応じた指導・支援方法の工夫  
 寄宿舎：コミュニケーション力を育む生活指導

# 幼稚部の研究

## II 幼稚部の研究

### 1 研究主題

確かな学力，コミュニケーション力定着のための授業づくり  
～コミュニケーション力の向上を図る保育活動～

### 2 主題設定の理由

#### (1) 幼稚園教育要領から

平成20年の幼稚園教育要領によると，幼児期における教育は，生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり，教師は，幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想をして，計画的に環境を構成し，様々な役割を果たしながらその活動を豊かにしなければならないとされている。これは，教師のあり方によって子供の成長に大きな影響があることを示している。

#### (2) 学校教育目標から

本校では，「聴覚口話法を基盤に，個に応じたコミュニケーション手段を用いて，言語力，コミュニケーション能力，学力の向上を図り，『生きる力』を身に付けた，心豊かでたくましい人間を育成する」を学校目標として掲げている。

平成24年度からの3年間，「学力の向上を目指した取組」というテーマのもと，学力を「生き生きと生活する力」と捉え，自分のことばで豊かに表現できるようになることを目指し，豊かなことばで表現する子供を育むための教師の関わり方について研究を進めてきた。ことばの力は，指導の結果がすぐに表れるものではないものの，教師一人一人の意識のもち方で確実に成長することや，関わるポイントをさらに具体的にすることで子供たちが豊かなことばを獲得し表現できるようになることが確認できた。

平成27年度からの全体研究テーマ「確かな学力，コミュニケーション力定着のための授業づくり」をうけ，幼稚部でのテーマを「コミュニケーション力の向上を図る保育活動」とし，教師の指導のあり方について研修を進めていく。

#### (3) 幼稚部の実態から

指導の専門性が叫ばれる中，豊富にある資料の整理や指導法の継承が進んでいない状況がある。それを解消するために，本研究では，教師の指導法に視点を当てて研修を進めていく。子供たちの注目を引き付け，「ききたい」，「伝えたい」と思えるような保育環境を設定することで，子供たちはこれまで以上に人の話に興味をもち，積極的に自ら伝えようとする力が高まると考え，効果的な指導方法を明らかにしながら，幼稚部での指導実践の基本的な部分をまとめ，職員で共通理解・実践することで保育力向上を目指したい。具体的には，年間指導計画を見直し指導のポイントをまとめる。さらに昨年度見直した指導計画をもとに保育実践を行い，子供や保護者への関わり方，ことばや教材の提示の仕方など具体的な指導方法に関することをまとめる。

### 3 研究仮説

子供たちの注目を引き付け，「ききたい」，「伝えたい」と思えるような保育環境を設定することで，子供たちはこれまで以上に人の話に興味をもつようになり，積極的に自ら伝えようとする力が高まったりするのではないかと。

#### 4 研究方法

- (1) 年間指導計画等を見直し、各保育活動での配慮事項や保護者支援の内容について資料としてまとめる。基礎研修として、聴覚障害児への関わり方や指導方法などの内容を取り入れる。
- (2) 研究授業や授業研究等を通して、コミュニケーション力を高める保育実践に必要な観点と指導の手立てと子供や教師の変化を検証していく。

【H27年度の研究】	
乳幼	：集団活動Ⅰにおける指導のポイントの確認
幼稚部	：おはよう、保護者支援、絵日記における指導のポイントやことばや教材の提示の確認
自活	：自立活動の指導の領域の見直しと資料収集
【H28年度の研究】	
乳幼	：制作遊びにおける指導ポイントの確認と集団活動Ⅰの保育実践
幼稚部	：「ことばのしおり」の、年齢毎のことばとやり取りの確認と「おはよう」の保育実践
自活	：自立活動の指導の年間指導計画の作成と実践
【H29年度の研究】	
乳幼	：感覚遊び、素材遊び、見立て遊びの指導ポイントの確認と集団活動Ⅰの保育実践
幼稚部	：「ことばのしおり」の活用と保育実践
自活	：自立活動の指導の年間指導計画の作成と実践

#### 5 研究経過

		内 容	
平成 27 年 度	1 学期	基礎研修：子供への関わり方、発音指導、音・ことば遊び、絵日記 研究授業、授業研究（おはよう：年中）	↑ 年間指導 計画の 見直し ↓
	2 学期	研究授業、授業研究（おはよう：年中、2歳児）	
	3 学期	研究授業、授業研究（おはよう：年長、2歳児） 研究のまとめ（1年次）	
平成 28 年 度	1 学期	基礎研修：子供への関わり方、 研究授業、授業研究（おはよう：年少、2歳児）	
	2 学期	研究授業、授業研究（おはよう：年少、2歳児、自活）	
	3 学期	研究授業、授業研究（おはよう：年少、2歳児） 研究のまとめ（2年次）	
平成 29 年 度	1 学期	基礎研修：口声模倣、聴覚口話法 研究授業、授業研究（おはよう：2歳児、設定保育：年中）	
	2 学期	研究授業、授業研究（おはよう：2歳児、設定保育：年中） 本年度の学部の研修のまとめ（3年次） 九州地区聴覚障害教育研究大会	
	3 学期	来年度の研修に向けて	

## 6 研究の実際

### (1) 年間指導計画に関して（保育活動の内容と配慮事項）

#### ア 「おはよう（朝の会）」についてのまとめ

「おはよう（朝の会）」について、ねらい、環境設定、活動の内容事の展開例など各個人で行っているものを出し合った。親子でのやり取り、リズムや音に関する遊び、絵や絵本を使った活動などでの留意点などを具体的に確認することができた。

0 〜 2 歳 児	<p>ね ら い</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・身近な人に、親しみや安心感をもつ。</li> <li>・身の周りに様々な人がいることを知り、友達と関わって遊ぶ楽しさを味わう。</li> <li>・保護者や身近な人に話し掛けられたり、声や指差し、身振り、手話、物などを用いた表出を受け入れてもらったりしながら、やり取りを楽しむ。</li> <li>・身の回りのいろいろな物を見たり、触れたりして遊び、興味や関心を広げる。</li> <li>・全身を使う遊びや、手や指を使う遊びを楽しむ。</li> <li>・見立て遊びや、つもり遊びを楽しむ。</li> <li>・身近な音楽やリズムに親しみ、体を動かして遊ぶ。</li> <li>・絵や絵本を見て楽しむ。身の周りの音や声に関心をもつ。</li> <li>・身の周りの音や音楽を、身近な大人と楽しんでいく。</li> </ul>
環 境 設 定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・太鼓などを使って注目を集める。</li> <li>・絵カードを提示して視覚的に情報を保証する。</li> <li>・指さしや自然な発声が出る場面、大人や友達同士でのやり取り場面を設定する。</li> </ul>
展 開 例	<p>【リトミック（動物の行進、動物体操）】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・擬音語、擬態語、鳴き声、体の動きなどの体験を通して、動物のイメージを膨らませる。</li> <li>・いくつかのバージョンを設定し、扱う種類を増やすと共に、選択する場面を設ける。</li> <li>・曲の始まり、変化、終わりを意識付け、音の on, off に気付けるよう促す。</li> <li>・リズムを感じたり、親子で触れあって楽しめたりする雰囲気作りをする。</li> </ul> <p>【あいさつ、名前呼び】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・名前カードを提示し、注目を促したり、呼ばれている人を意識付けたりできるようにする。</li> <li>・挙手、声、「はい」という返事など、呼名に応じられるようモデルを示したり、できた際には賞賛したりする。</li> <li>・「ちょうだい」「どうぞ」「ありがとう」のやり取りで人と関わる喜びを体験できるようにする。</li> </ul> <p>【音遊び、歌遊び】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・音の存在に気付き、「きこえた」と伝える方法を身に付けられるようにする。</li> <li>・親子での歌遊びを通して、親子で触れ合いながら遊び、信頼関係を育み親子関係の基礎を育てる。</li> <li>・季節の歌などを通して、リズムを楽しんだり、歌詞を通して言葉への関心を高めたりする。</li> </ul> <p>【息遊び】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大人がモデルを示したり、親子で遊んだりすることで、自発的な動きを誘う。</li> <li>・強く、弱く、優しく、長く、短くなど吹き方を変えることで、息のコントロールを身に付けられるようにする。</li> </ul>

		<p><b>【楽器遊び】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな種類の楽器の音や音の出し方を楽しめるようにする。</li> <li>・一定のリズムで音を出すなど、楽器の操作を通して、リズム感を培っていく。</li> <li>・楽器の音の違いに気付けるようにする。</li> </ul> <p><b>【絵本】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・絵の輪郭や色使いのはっきりした物を選ぶなど、年齢に応じた絵本を選ぶ。</li> <li>・絵本の動きをまねて動作化して楽しめるようにする。</li> <li>・擬音語、擬態語の使われているもので、イメージを膨らませやすいようにする。</li> <li>・繰り返しの場面やせりふなどのあるものは、動きやせりふをまねるよう促していく。</li> </ul>
3 く 5 歳 児	ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一日の始まりに当たり、今日の活動に見通しをもち、意欲的に学校生活を送れるようにする。</li> <li>・楽しんで活動に参加し、自分の思いを様々な方法で表現する。</li> <li>・話し掛けに対して、分かるようにする。</li> <li>・相手を見て話をきくことができる。</li> <li>・友達の話に相づちをうったり、質問したりすることができる。</li> <li>・友達に伝えたり、友達からの質問に答えたりする。</li> </ul>
	環 境 設 定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話題になりそうな事柄に関連する絵カードや実物などを用意しておく。</li> <li>・保護者から、家で変わったことや話題になりそうなことなどがあれば知らせてもらう。</li> <li>・お互いに相手を見ることができるよう座席を配置する。</li> <li>・文字や絵を板書できるようにしておく。</li> </ul>
	展 開 例	<p><b>【はじめのあいさつ】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友達の名前、当番という言葉、役割が分かるようにする。</li> <li>・当番に体を向け姿勢を確認してから始める。</li> <li>・毎回使う言葉は、音声のみで指示を出す。</li> </ul> <p>※</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・質問することやされることに慣れるように、当番の紹介や、当番に対して質問する時間を設定する。</li> </ul>
	は 気 を 付 け た い ポ イ ン ト	<p><b>【歌（おはようの歌と季節の歌）】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽に合わせて歌ったり、身振りを付けたりして楽しく歌うようにする。</li> <li>・子供たちの見えるところに歌詞カードを掲示しておく。</li> <li>・楽器を使ってリズム打ちをすることもある。</li> <li>・元気な声で歌うようにことば掛けをする。</li> </ul> <p>※</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>※当番の指示に目と耳を傾けてきいているか。</li> <li>※歌を楽しみながら身振りをしているか。声を出しているか。</li> </ul> <p><b>【朝のあいさつ】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>※目を見てあいさつができていないか。口を動かして声を出しているか。</li> <li>※口形や音数、リズムが合っているか確認する。</li> </ul> <p><b>【健康観察】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・健康状態のいろいろな表現に触れる。機会を見て絵カードを提示し、一緒にことばを言う。</li> <li>・当番は体調を確認してから朝ご飯に何を食べてきたかなど質問する。</li> <li>・食べたものを覚えて答える。きいている子供たちは復唱したり、質問したりする。</li> <li>・友達の健康状態へも意識を向け、病気やけがをしているときには、どうしてそうなったか、どうしたら治るのかなど、話を深めるようにする。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当番は保健室に健康観察簿を持って行く。「いってきます」「いってらっしゃい」のやり取りを促す。帰ってきたときは「ただいま」も言う。</li> <li>・当番以外の子供たちは、数を数えたり、歌遊びをしたりして待つ。</li> <li>・友達の名前を身振りや音声で表現できているか。</li> <li>・友達の名前を呼ぶときに友達の顔を見ているか。</li> <li>・当番が話しているときに当番のことをよく見ているか。</li> </ul> <p>【今日の活動の話】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今日することについて絵カードを提示したり実際に動いてみたりして、活動を想像できるように話をする。</li> </ul> <p>【トピックス（話し合い）】</p> <p>聾学校では、子供から出た突発的な話題を大切にしている。そのとき子供が興味をもっていることに付き合い、みんなで話題を共有しながら、話をどんどん広げていく。気付いたことから考えさせる場面を作ったり、自分の考えを言い合ったり、「あ!」「そうなんだ!」という更なる気付きを促したりしながら、子供からの表出を大事にしていく。</p> <p>「おはよう」の流れの中でも、日付のことで止まったり、天気をつまづいたり、突発的に起こった出来事に意識が向いたり、いろいろなことが起こる。「おはよう」の流れをきれいに進めることよりも、話したい意欲を受け止めたり、子供たち同士で反応し合ったりすることを大切に扱う場面もある。</p> <p>※子供同士で話題を共有できるように、文字やイラストを板書する。      ※間違えて覚えていることばがあったときには、適宜、指文字や板書で確認する。</p>
--	--

イ 「保護者支援」についてのまとめ

0 歳 児	目 標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・愛情と信頼に基づいた、安定した親子関係が育つための支援をする。</li> <li>・心身の健康や人間関係、基本的な生活習慣の育成等、子供の全体的な発達を促す。</li> <li>・補聴器の装用に慣れるように促すとともに、日常生活の中で聴覚を活用する力を育てる。</li> <li>・遊びを通して言葉の獲得の基盤を育てる。</li> <li>・聴覚に障害のある乳幼児の育て方について、保護者の理解を深める。</li> </ul>
	支 援 の 内 容	<p>【初相談】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・きこえについて（音の大きさや周波数、補聴器等の活用、オーディオグラムの見方など）</li> <li>・聴覚障害のある子供への基本的な関わり方、大切にしたいこと</li> <li>・補聴器の適合と管理</li> </ul> <p>【初回講座：主に初相談に来られた方が対象】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・耳の話      ・難聴シミュレーション      ・聴覚障害児の育て方      ・聴覚相談センターより</li> </ul> <p>【保護者学習会：担当主催 年数回】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インリアルについて      ・きこえ、補聴器、人工内耳について      ・就学、今後の進路選択について</li> <li>・絵カードの作成と使い方      ・絵日記の取組について      等</li> </ul> <p>【保護者学習会：保護者主催 年2~3回】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・先輩保護者の話      ・情報交換会      等</li> </ul>

		<p>【保育時】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・赤ちゃんや子供の抱き方，目線の合わせ方，立ち位置</li> <li>・ことばの掛け方，コミュニケーション手段</li> <li>・わらべうた遊び</li> <li>・発音の基礎遊び</li> <li>・子供への関わり方や遊び方のポイント</li> <li>・家庭での応用の仕方</li> </ul>
3 5 歳 児	担 任 の 目 標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聴覚障害幼児の教育においては，学校と家庭の連携が不可欠であり，学校では幼児への指導と共に保護者支援が重要である。学習会や教育相談を通して，保護者が聴覚障害や子育てについて学んだり，悩みを解決したりする機会を提供する。（教育課程における保護者支援のねらい）</li> <li>・保護者の役割を自覚できるような支援を行う。</li> <li>・子供の成長や課題をその都度伝えていく。</li> <li>・子供の様子や関わり方について自分で考えようとするを大事にしながら，子供がどのように育ってほしいか，保護者の考えを整理できるような支援を行う。</li> </ul>
	め ざ す 保 護 者 像	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供の相手を楽しむことができる。</li> <li>・子供の課題を的確に捉えられる。</li> <li>・子供の成長を感じることができる。</li> <li>・聴覚障害の場合にある，課題について分かる。</li> <li>・子供のためにやってみようという気持ちをもつ。</li> <li>・子供の実態をよく理解し，子供に合った就学先を選択することができる。</li> </ul>
	支 援 の 内 容	<p>【連絡・クラス便り】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子供の様子や気掛かりなことについて保護者と話し合う。</li> <li>・聴覚障害によって生じる問題については，具体例を挙げて話す。</li> <li>・指導の方針について確認する。（保育活動や指示の変更の意図，今後の取組など）</li> <li>・個々の課題や家庭での取り組み方について伝え合う。</li> <li>・就学に向けての話をする。（現時点での就学先，就学先の様子，卒業生の様子や課題など）</li> </ul> <p>【連絡帳】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日々の記録に対するコメントを記入する。</li> </ul>

#### ウ 「絵日記」についてのまとめ（3～5歳児）

幼稚部の絵日記とは，子供と保護者・教師がそれを媒体として話し合いをするものであり，子供が絵や写真や実物を見ることによって過去の経験を想起し，いろいろなことを話す態度，話す意欲を湧かせるものと言える。

3 5 歳	ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親子で絵日記を手掛かりにして話し合うことで気持ちを通じ合わせ，親子関係を深める。</li> <li>・出来事や思ったことなどを整理して話す経験を通して，伝えることの楽しさを味わう。</li> <li>・絵日記を手掛かりとしたやり取りを通して新しいことばや表現方法を知る喜びを味わう。</li> </ul>
	取 組 例	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日々の生活経験を印象深く話しておく。</li> <li>・一日の経験をもとに子供と十分話し合いをする。</li> <li>・絵日記で何を取り上げて書くかを決める。</li> <li>・経験を整理して絵を描いたり，実物を貼ったりして絵日記を作り上げる。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵をもとにして、子供と話し合いをする。</li> <li>・話し合いを整理し、文でまとめる。</li> <li>・絵をもとに「問い掛け」をする。</li> <li>・まとめた文章を大人が読み、子供にも読ませる。</li> <li>・センテンスごとに、大人の後から子供が読む。</li> <li>・大人が全文を読み、その後、子供にも全文を通読させる。</li> <li>・絵だけを見て、全文を言えるようにする。</li> <li>・何も見ないで暗唱できるようにする。</li> </ul>
教師の支援	<p>【子供への支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合う。                      ・経験を言葉で整理する。                      ・気持ちを表現する。</li> <li>・やり取りの楽しさを体験する。                      ・新しいことばを見付ける、気付く、覚える。</li> <li>・新しい文、質問、答え方などを知る、覚える。                      ・発音指導                      ・口声模倣</li> </ul> <p>【保護者への支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子供の実態や状況把握                      ・課題の妥当性についてのアドバイス</li> </ul>

エ 具体的な指導内容のまとめ

(ア) 0～2歳児

従来使用している年間指導計画に合わせて、実際の保育で留意していること、取り扱う内容やそれに関することば、押さえないポイントなどについて確認した。資料としてまとめられるように毎回の保育について子供の様子や指導内容の記録を残すようにした。

資料の書式設定に当たり、見やすさ、分かりやすさ、使いやすさの点が話題になった。

また、子供の様子や補聴器等についての情報交換を行う時間を設け、補聴器に関する知識や子供の成長や課題についての共有を図った。

【制作遊び】季節・行事関連			
作品例 1学期：こいのぼり、母の日・父の日のプレゼント、七夕（飾り、織り紙と彦星） 2学期：敬老の日のプレゼント、ハロウィン、文化祭の作品 クリスマス（ツリー、リース、サンタ） 3学期：風、福笑い、鬼のお面、雛人形			
主な活動	道具・材料	具体的な活動	関することば
かく	ペン クレヨン クーピー、 色鉛筆  絵の具 (手、筆)	自由にかく  ・点描 ・線画 ・ぐるぐるまる イメージしてかく ・顔 ・形 ・好きなもの ・身近なもの	<動きや様子のことば> かきかき、ぬりぬり てんでん、とんとん しゅー、びゅーん、ざーざー ぐるぐる、まる（まーる）、ぎざぎざ かく、ぬる  <名前やものに関することば> 顔のパーツ 形の名前 作るものの名前、関することば 色の名前（3原色、白黒、12色） 色に関することば (赤い、白い、濃薄等) 使っている道具や材料の名前
はる	のり ボンド テープ	自由にはる 見本と同じようにはる パーツをつなぐ 輪飾りを作る	<動きや様子のことば> べたべた、べたっ、べたべた、べたっ くるくる、ぬりぬり ぬる、とる・はぐ(裏紙)、はる 同じ、短い、長い、  <名前やものに関することば> ※「かく」に同じ
ちぎる やぶる	お花紙 ティッシュ 折り紙 新聞紙	自由に行う 大きさを考えて行う ガイド線に沿って行う	<動きや様子のことば> びりびり、びりっ ちよきん、ちよきちよき ちぎる、やぶる、きる 半分、小さい、大きい、同じ 短い、長い、細い、太い 線を見て、線に沿って  <名前やものに関することば> 線 ※「かく」に同じ
きる	はさみ	はさみで切る ・一回切り ・直線 ・曲線	<名前やものに関することば> 線 ※「かく」に同じ

保育のポイント例：「制作遊び」



オ 自立活動

(7) 現状と課題

幼稚部自立活動の教育課程の項目が「聴能・発音」のみで障害認識に関するものがない。

(1) 取組について

幼児期に小・中・高等部の前段階として障害認識に関する学習を取り扱う必要がある。そこで今まで自立活動の時間外で行っていたことや取り扱っていなかったことを教育課程に記し、位置付けることで系統的な指導を行っていくために作成することとする。平成27年度は他校の取組についての情報や資料収集を行い、平成28年度から自立活動において障害認識の指導内容を具体的に掲げ、「きこえ・補聴器・人工内耳に関すること」、「情報保障に関すること」、「自分の聴覚障害について知ること」として提示し、年間指導計画の作成に取り組んだ。

		指導内容		
		きこえ・補聴器・人工内耳に関すること	情報保障に関すること	自分の聴覚障害について知ること
1	年	<ul style="list-style-type: none"> <li>きこえる きこえない がわかる。</li> <li>補聴器や人工内耳を嫌がらずに付ける。</li> <li>補聴器や人工内耳を常時装用する。</li> <li>補聴器や人工内耳の基本的な扱い方を知る。</li> <li>電池しらべを習慣化してできる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>聾学校と交流圏との伝え方が違うことに気付く。</li> <li>話し掛けられると相手に注意を向け、話し掛けの内容を分かろうとする。</li> <li>交流圏やコミュニケーション手段の異なる友達と仲良く遊べる。</li> <li>絵や文字に親しむ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>きこえないきこえにくい人がいることに気付く。</li> <li>補聴器や人工内耳を付けている人と付けていない人がいることに気付く。</li> <li>身近な大人に見守られながら、明るく伸び伸び行動する。</li> <li>気持ちを受け止めてもらいながら自分を肯定的にとらえ、身近な人に信頼感をもつ。</li> </ul>
2	年	<ul style="list-style-type: none"> <li>補聴器や人工内耳は大事なものの、丁寧に扱うものだと周りから言われると分かる。</li> <li>電池調べをする理由を考えることができる。</li> <li>友達に補聴器や人工内耳のことをきかれたときに説明ができる。</li> <li>家庭で困ったときにどのように対処すればよいか考えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な大人とのやりとりの中で、相手の話が分からないと、きき返す。</li> <li>自分の経験したことや思っていることを、自分から積極的に伝えようとする。</li> <li>情報や自分の思いを伝えるための方法がいろいろあることに気付く。</li> <li>交流圏やコミュニケーション手段の異なる友達に意思や気持ちを伝えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分は補聴器や人工内耳をしていないと、きこえにくいということに気付く。</li> <li>自分がきこえにくいということを受け止め、周りの人と積極的に関わろうとする。</li> <li>きこえにくいことを友達に説明することができる。</li> <li>補聴器や人工内耳を付けている理由について考える。</li> </ul>
3	年	<ul style="list-style-type: none"> <li>補聴器の簡単な名称を知る。</li> <li>補聴器・人工内耳の手入れの仕方を知る。</li> <li>耳の簡単な仕組みや働きを知る。</li> <li>日常生活で気を付けたい音のマナーについて知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>交流圏やコミュニケーション手段の異なる友達に自分の意思や気持ちを伝えられる。</li> <li>周りの人にきこえにくいことをどのように説明するか考えることができる。</li> <li>話が伝わらないときに、周囲に働き掛けることができる。</li> <li>友達同士でも、話の中で口話と共に、身振りや文字も活用しながら伝え合うことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>話を通じなかったり、周囲の状況が理解できなかったりすることに気付く。</li> <li>話を通じないときには、表現を変えたり、発音に気を付けたりして、伝わるように話そうとする。</li> <li>きこえない・きこえにくい仲間が学ぶ場所に気付く。</li> <li>身体障害者手帳について知る。</li> <li>成人聴覚障害者の生活に興味をもつことができる。</li> </ul>

【自立活動 障害認識の教育課程】

(2) コミュニケーション力を向上させるための保育実践のあり方

保育作りにおける観点を0～2歳児，3～5歳児に分けて設定し，日々の保育実践に努めるとともに研究授業や授業研究を実施して，振り返りを行った。

保育作りにおける観点	
0～2歳児	3～5歳児
<p>○展開・構成：保育の展開と構成（実態に即した教材，保育構成，教師の意図，個別への配慮，子供同士の関わり）</p> <p>○共感：コミュニケーション態度（共感的関わり，楽しむ，インリアル）</p> <p>○聴覚活用：聴覚活用（場の設定，補聴器の確認）</p> <p>○伝達：伝え方（話す速度，抑揚，注視の促し方，教材の提示，ことば）</p> <p>○保護者支援：保護者支援（モデルの提示，賞賛，遊びの共有）</p>	<p>○展開・構成：保育の展開と構成（実態に即した教材，保育構成，教師の意図，個別への配慮，子供同士の関わり）</p> <p>○共感：コミュニケーション態度（共感的関わり，表現意欲の喚起，ほめる，楽しむ）</p> <p>○聴覚活用：聴覚活用（座席，補聴器の確認，集団補聴器の活用）</p> <p>○伝達：理解力（注視の促し方，適切な伝達方法）</p> <p>○発問：思考力（適切な発問，補助質問と支援）</p> <p>○言語・定着：日本語（言葉への置き換え，口声模倣，指文字や文字の適切な使い方）</p>

ア 0～2歳児

平成28年度は2歳児の週1回クラスで保育実践を行った。このクラスは，発達の課題から療育やリハビリ等に通っていたり，家庭の都合で保育に参加する回数が少なかったりする子供たちで構成されており，個々の発達の程度や保護者の聴覚障害のある子供の子育てに関する知識と経験に大きな開きがある。

リトミック的な活動，歌，あいさつ，お名前呼び，絵本やトピックスといった毎回ほぼ同じ流れで展開される「おはよう」を取り上げ，保育実践の検証を行った。保育活動の計画を立てる際に，「展開・構成」，「共感」，「聴覚活用」，「伝達」，「保護者支援」の項目ごとに具体的な配慮事項を立て，項目ごとに振り返りを行い授業の改善を目指した。また，「おはよう」の中でトピックスとして季節に関することや音器遊びなど子供の課題に応じた活動を取り入れるようにした。

【研究授業後のアンケート結果】

○：よい点      ★：課題

	1学期	2学期	3学期
展開・構成	<p>○子供の注目を引き付ける手立ての工夫</p> <p>○子供が操作や体験ができる教材の提示</p> <p>○遊びたいと思えるような教材の工夫</p> <p>★トピックスの活用（天気についてなど）</p>	<p>○子供の実態に合わせた教材の工夫</p> <p>★教材で遊ぶ時間の設定</p> <p>★安全面への配慮</p>	<p>○擬音語や擬態語をたくさん使える絵本の選択</p> <p>○活動が変わるときの注目の集め方</p> <p>○子供同士がお互いを意識できる言葉掛け</p> <p>★トピックスの取り上げ方（子供同士で起こったトラブルについて）</p> <p>★子供が分かって楽しめるための活動量</p>
共感	<p>○子供同士で誘い合う場面の誘導</p> <p>○子供の行動や気持ちを言葉として反射</p> <p>★活動への参加や気持ちの切り替えが難しい子供への対応</p>	<p>○子供たちと物の形状について共感</p> <p>○子供の視線や指さしを意識した言葉掛け</p>	<p>○子供同士のトラブルへの対応</p> <p>○褒める場面の多さ</p> <p>○楽しいという気持ちが伝わる関わり方</p>

聴覚活用	★補聴器の装着習慣が確立していない 子供への支援	○音楽を流す際の音への気付きの促し方	○歌などで曲を流す際の言葉掛け ○子供の注目を促してからの話し掛け ★声の調子、音の大きさなど音への意識付け
伝達	○子供に合わせた話すスピードの変化 ○子供が分かる表現や伝達の仕方	★絵カードと実際の体験との結び付け	○歌に出てきたものの名前や特徴などの取り上げ方 ○個々に応じた教材の見せ方の工夫 ○絵本を読むときの伝わりやすい表情 ★集中しにくい子供が参加できる場面での言葉掛け
保護者支援	○子供の様子の保護者への伝達と共有 ○保護者も子供も楽しめるような環境作り ★経験が浅く表情の硬い保護者への対応 ★職員間の連携	★S Tとの連携 (保護者へのチーフの意図の伝達)	○子供のトラブル場面に関する関わり方のS Tによる具体的な支援 ○本日の目標の掲示 ○家庭でも取り組むように依頼

平成 28 年度の 1 学期の実践において、集中しにくい子供たちの注目を促したり、興味を引いたりするような教材の提示はできているものの、職員間の連携や保護者への支援について課題が挙げられたため、参加回数が少ない子供がいる場合の保育体制について話し合い、保護者にも気付いたことをできるだけ伝えるよう心掛けた。

2 学期においては、共感することや音への気付きを促すような働き掛けはできているものの、職員間の連携が課題としてあげられた。前回と同じように職員間の連携が課題に挙げられるのも、集団を構成するメンバーが多少入れ替わるため、参加回数の少ない親子について保護者への支援や集団に入れにくい子供への対応について実態把握や職員の連携についての話し合いが十分に行えていないからだと考えられ、その後、参加回数の少ない親子については随時話題にし、参加した場合の対応などについて話すように心掛けた。

3 学期には、子供のトピックス的な場面での対応を職員がフォローし合ったり、子供の様子や保護者ができていることを伝えたりすることができた。家庭での取り組みや課題についても以前に比べて保育中に話題にできるようになった。集中しにくい子供たちだったが、活動の中で友達のことを意識するようになり、教材そのものや提示の仕方を工夫したり、言葉掛けの際の声のトーンや間を変えたりしたことで、子供が注目したり集中したりする様子が見られるようになった。

しかし、集団構成が変わることも多く、お互いに情報交換や研修等を行い、個々の実態に応じて興味や注目を引き、親子で楽しめるようなよりよい保育実践ができるように、保育の振り返りを継続していく必要があった。



2 歳児保育場面 (写真 1)

平成 29 年度は、2 歳児の週 2 回クラスで保育の実践検証を行った。興味・関心が高く、やり取りを楽しむ子供が多い集団の中で、各場面でのことばの広げ方、それぞれの子供の反応や思いへの付き合い方、集団に入れなかったり、自分を発揮しにくかったりする子供への対応の仕方、集団として子供同士の思いの共有の方法、保護者支援など、教師間で共通理解をしたり、連携を図って保育を進めることについて話し合ったりした。保育研究を進める中で、子供からの小さな発信を受け止めたり、意識して子供を褒めたりするようにした。また、子供の興味に合わせて活動を展開することを心掛け、子供の課題となる行動については職員間で関わりを共通理解して対応するようにした。子供の興味に応じた保育展開をさらに心掛けたことで、子供の興味や相手に伝えようとする意欲が高まってきた。

### イ 3～5 歳児

平成 28 年度は、3 歳児（年少）クラスでの「おはよう」の時間での話し合い活動を中心に、保育実践の検証を行った。保育活動の計画を立てる際には、「展開・構成」、「共感」、「聴覚活用」、「伝達」、「発問」、「言語・定着」の観点を考慮し、項目ごとに振り返りを行った。

#### 【研究授業後のアンケート結果】

○：よい点   ★：課題

	1 学 期	2 学 期	3 学 期
展 開 ・ 構 成	○幼児の理解を促すための歌詞カードや写真カードの掲示 ○幼児発信の話題での展開 ★話題の柱の決定	○幼児の実態に合った題材と活動の選択 ○予想外の出来事への対応 ★時間の配分	○幼児同士をつなげる仲介としての役割 ○幼児を引き付ける教材の工夫
共 感	○幼児の意思表示の受け止めと賞賛 ○できたことに対する喜びの共有 ★幼児の望ましくない行動の受け止めと気持ちの切り替えの工夫	○幼児の発信の受け止めと他児への伝達、共感 ○共感的な関わりや褒め方 ★受け止めるところ、流すところのバランス	○受け止めるところ、流すところのバランス ○豊かな表情と褒めるタイミング
聴 覚 活 用	○音楽の始まり（ON・OFF）の確認 ○実態を考慮した座席配置 ★動と静、ON と OFF を使った傾聴場面	★保育前のきこえの確認（マイリンク、電池等）	○きこえの確認の習慣化
伝 達	○視線が合っていることの確認 ○豊かな表情とリアクション	○教材の準備や提示のタイミング ★幼児がうまく思いを伝えられな いときの板書等の工夫	○理解を促すための教材の準備
発 問	○的確な実態把握と実態を踏まえた発問や身振り等での支援 ○幼児が考えて決める発問、間の工夫 ★セルフトーク、モニタリングの意識	○教材を提示する際の思考を促す発問	★思考・記憶を促す発問と視覚教材を提示するタイミングやバランス

言語・定着	○視線を合わせた口声模倣の徹底 ★口形を見る, 合わせることへの意識	○気持ちの言語化 ○幼児が言葉で伝える習慣作り ★構文での口声模倣の意識 ★思考を促すやり取りと言語指導のバランス	○幼児の実態に合った口声模倣の意識 ★課題意識をもった助詞の指導 ★写真・絵に併せた文字の提示

平成 28 年度の 1 学期は, 幼稚部に入学して間もない子供と視線を合わせて話すこと, 口声模倣を誘うことなど, コミュニケーション上のルール作りを意識して取り組むことができた。また, 子供の「伝えたい」という気持ちを育てるために, 子供からの発信をしっかりと受け止めてトピックスとして扱った。子供に決定権のある活動を取り入れたり, 何か伝えられたことを称賛したりすることができた。子供たちの年齢的な実態からも興味に移りやすく, 話題が飛び過ぎることがあったので, 話を深めつつ, 子供同士をつなげる意識をもつように心掛けていった。

2 学期は, 子供の集中力が少しずつ高まり, 伝えようとする気持ちや言葉も育ってきた。対象学級の子供のコミュニケーション手段(口話中心と手話中心)が大きく異なることもあり, 子供一人の発信を教師が介入して他児にも広めることを意識することで, 友達を意識して行動することが増えてきた。時には意見がぶつかることもあったが, 自分の意見を何とか通そうと子供同士で関わり合うことも増えた。子供同士のやり取りを大切にしたら, 言語指導の場面が減り, そのバランスの難しさについて, 職員間で話することができた。



授業研究の風景(写真 2)

3 学期は, 子供同士をつなげる仲介役としての役割を意識してかかわれるようになり, 子供たちも一つの話題でじっくり話ができるようになってきた。言葉で伝える意識や様々なルールも身に付いてきている。子供の実態差が大きくなり, 視覚教材を提示するタイミングなどについては検討していく必要を感じた。また, 実態差のある集団での話合い活動の進め方や教師の役割について, 意見交換を行うことができた。

平成 29 年度は, 4 歳児(年中)クラスで設定保育の保育実践を行った。聴力差があり, コミュニケーション手段の異なる集団において, 積極的に発信してくる子供たちの話題をどのように整理するか, 教材の工夫はなされているものの, 話題やことばを押さえて理解できるように効果的に視覚情報を提供することの大切さなどが話し合われた。保育実践の振り返りを行い, 実態差に合わせて視覚情報で理解を促したり, 子供に分かりやすい褒め方を工夫したり, 相手が見やすい座席の位置や距離を工夫したりしたことで, 子供からの発信が増えたり, 子供同士で褒め合うような雰囲気になったり, 子供同士のやり取りが活発になったりしてきた。

## ウ 自立活動

平成 28 年度に研究授業を行い、どのような内容に取り組んでいるかを全体で共有し、よりよい授業のあり方について検討した。例えば友達が泣いている様子や友達とけんかをしている様子など、生活の中で起こりえそうな様々な場面の絵を見せてどんな様子か、どんな言葉を掛け合えばいいか、どんな行動をとったらよいかを一緒に考えて言語化するようにした。

また、言葉のネットワークを様々な方向に広げられるように幼児の個々の実態や行事に合わせて家庭でも行えるようなプリントを作成し、共有できるように電子化した。

さらに、子供が興味をもち自ら進んで活動できるように、実態に合わせて教材を工夫したり、課題内容のポイントや目的などを担任や保護者と共有したりすることで、ことばの理解や定着を図った。

## 7 成果と課題

### (1) 成果

#### <年間指導計画に関して>

- ・ 学年で意識したい言葉、押さえておきたいやり取りなどを考えるきっかけとなり、子供たちへの指導について、まとめたり整理したりすることができた。
- ・ 先生方の指導法や指導のポイントを知ることができた。
- ・ 年齢ごとの言葉の獲得に視点を置き、各学年で共通する言葉など、行事ごとに「ことばのしおり」の見直しをして、複数の職員で確認できた。
- ・ いろいろな資料に目を通す中で、障害認識について理解を深められた。

#### <保育実践に関して>

- ・ 子供への関わり方や保護者支援について振り返るきっかけとなった。
- ・ いろいろな取組を見て自分の指導の参考にすることができた。
- ・ 保育に関する観点を決めたことで、保育作りの段階や授業参観において意識することができ、授業研究で討議がしやすかった。
- ・ クラスの中でお互いを意識してやり取りをする様子が出てきた。
- ・ 興味をもちやすい教材の工夫により親子とも主体的に参加するようになった。
- ・ 共感すること、関わり方のモデルを示すことの確認ができた。
- ・ 子供の意欲を引き出す関わり方やタイミングの取り方について研修ができた。
- ・ 新聞やニュースの出来事などにも興味をもてるようになり前より会話が増えた。
- ・ 指導の振り返りができた。
- ・ 指導内容を工夫し、積み重ねの中で集団の質の向上に努めた。
- ・ 子供への対応や保護者へのアドバイスを心掛けるようになった。
- ・ 子供の様子に気を配り、発信を受け止めるようにしたり褒め方を工夫したりした。
- ・ 保育内容を複数準備し、子供の様子に合わせて活動を展開できるようにした。
- ・ 子供の課題となる行動への関わりを、職員で共通理解して対応できるようにした。
- ・ 実態差に応じた具体物や視覚教材の提示や、お互いが見合える座席の位置の工夫をした。
- ・ 教材や発問を工夫し、理解や定着を促したり、思考を促したりした。

## (2) 課題

### <年間指導計画等について>

- ・ 学年のつながりを考えながら作成したが、つながりの確認が弱いところがある。
- ・ どのように見直したらいいか共通理解するのが難しかった。
- ・ 保育実践に必要な観点での評価の仕方ができていたか。「ことばのしおり」など資料の活用の仕方を工夫する必要がある。
- ・ 作成した障害認識の段階を活用しながら、年間指導計画を作成していく。

### <保育実践について>

- ・ 具体的な事例を元に、ことばの提示や口声模倣の方法をもっと研修し実践力を高めたい。
- ・ 子供に応じた具体的な指導のあり方や、保護者への効果的な言葉掛けをもっと知る必要がある。
- ・ 会話は広がったがあまり深まりがない。子供の思考力を促す保育作りの工夫が必要である。

## 8 研究のまとめ

子供たちがこれまで以上に人の話に興味をもつようになり、積極的に自ら伝えようとする力が高まることを目指し、子供たちの注目を引き付け、「ききたい」、「伝えたい」と思えるような保育環境の設定について研修を進めてきた。

年間指導計画を見直し、指導のポイントや配慮事項を整理したり、保育計画を立てる際に「展開・構成、共感、聴覚活用、伝達、発問、言語・定着、保護者支援」の項目に着目し、保育後に振り返りを行って改善したりしたことで、指導者側のポイントが整理された。そして、子供への指導や保護者への支援をより丁寧にできるようになったことで、子供たちの伝えたいという気持ちが育ち、音声言語をはじめ個々のコミュニケーション手段の伸びがみられるとともに、課題に取り組む意欲が感じられるようになった。教師の関わり方、褒め方などを子供たちがまねる様子が見られ、クラスの雰囲気がさらによくなってきている。また、子供たちが興味をもっていることを題材にしたり教材に取り入れたりすることで、子供たちの話題が広がったり、子供同士の関わりが増えたりしてきている。

しかし、日々の保育を振り返ってはいるものの、各場面における具体的な指導のあり方、評価のあり方や資料の活用などをさらに工夫し、改善していく必要はある。思考を促す保育展開や指導方法などを研修し継承しながら子供たちの豊かなことば、コミュニケーション力のさらなる向上を目指し、保育実践を進めていきたい。

## 参考文献

- 板橋安人 (2014) 「聴覚障害児の話しことばを育てる」
- 聾教育研究会 (2013) 「聴覚障害 7月号」
- 聾教育研究会 (2014) 「聴覚障害夏号」

# 小学部の研究

### Ⅲ 小学部の研究

#### 1 研究主題

確かな学力，コミュニケーション力定着のための授業づくり  
～「分かる授業づくり」のための ICT 機器の活用～

#### 2 主題設定の理由

平成24～26年度は，学力の向上を目指し，小学部では国語科「書く力」を育てる指導について検討や様々な実践を行うことで児童の語彙数を増やしたり，書く力を高めたりすることができ，書くことを意識した授業づくりを実践してきた。聴覚に障害のある児童にとって，視覚的な情報が不可欠であるため，これまで板書や様々な掲示物など児童に合った教材の工夫を行っている。さらに，今年度，児童に確かな学力，コミュニケーション力を定着させるため，有効な手立てとして ICT の活用に着目して「分かる授業」づくりに取り組みたい。

学習指導要領には，「情報教育」や「授業における ICT 活用」など学校における教育の情報化について記述されている。各教科での ICT 活用についても具体的な記述があることから，今後あらゆる教科の様々な場面において ICT を活用していくことが大切である。また，「合理的配慮」と「基礎的環境整備」を提唱している「インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」では，障害の状態等に応じた情報保障やコミュニケーションの方法について配慮するとともに，教材（ICT 及び補助用具を含む）の活用についても配慮するようになっている。特に，聴覚障害のある児童・生徒に対する教育においては，障害の状態や発達の段階に応じて適切な聴覚活用を図りながら，視覚等の他の感覚器官の情報に置き換えて情報を伝達する工夫が必要である。見える校内放送，教科書準拠デジタルコンテンツとプロジェクタや電子黒板を用いた情報機器等を活用することで，さらに視覚情報を充実させた指導の効果が高まることが期待できる。また，重複障害学級においても，情報教育は双方向的な関わりがしやすく，視覚的，聴覚的にも多様な表現ができるため，児童生徒が興味・関心をもちやすく，活用を工夫することで有効な教材・教具となると考えられる。

以上のことから，今ある ICT 機器を授業の中で有効活用することによって，コミュニケーション力を高めたり，授業内容の理解を促したりすることができれば，児童にとって達成感のもてる「分かる授業」が展開できるのではないかと考えた。

#### 3 研究の方法

##### (1) 授業設計

児童の実態から，目標設定や授業の組み立てを行い，有効と思われる ICT 機器の選択や活用方法等について研究を進めた。本校にある ICT 機器（タブレット，見える校内放送，電子黒板等）を活用した授業を実際に行って，有効な活用方法を検討していく。授業を行うに当たり，ICT 活用の意図を明確にした指導案を作成する。その際，ICT 活用のねらいやデジタルコンテンツ活用の8項目の視点から選択するようにした。

(資料1)

授業設計段階での ICT 活用の視点

(県総合教育センター資料)

① 教員による ICT 活用	② 児童生徒による ICT 活用
◎ 各教科の目標達成	◎ 児童生徒の情報活用能力育成
・ 教員自身が，下記の視点でコンピュータやプロジェクトなどを活用して効果的な提示などを行う場合	・ 児童生徒に，下記の視点で ICT を活用させ課題を解決させる場合
ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	オ 情報を収集したり選択したりするための活用
イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用	カ 自分の考えを文章にまとめたり，調べたことを表や図にまとめたりするための活用
ウ 分かりやすく説明したり，児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用	キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用
エ 学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用	ク 繰り返し学習や個別学習によって，知識の定着や技能の習熟を図るための活用

## (2) 研修グループ

平成27年度は、学習内容や授業の形態等から、国語・算数グループ（教科指導）、音楽グループ（下・上学年に分かれての合同学習、実技が中心の授業）、生活単元学習グループ（領域・教科を合わせた学習）の3グループに分けた。各グループで、授業内容や授業の回数等を検討し、授業内容や児童の実態に合った有効的なICT機器や活用方法を検討した。

平成28年度の研修では、算数グループ（教科指導）、体育グループ（下・上学年に分かれての合同学習、実技が中心の授業のグループ）、生活単元学習グループ（領域・教科を合わせた学習）の3グループに分けて行った。各グループで1つの教科のみに絞ることでより焦点を絞ってICTの活用の仕方等を研修できるようにした。

平成29年度の研究では、研究の最終年であることから、授業でより積極的にICT活用を図るために、研修グループを編成せずに、各自で、ICT活用をする教科・領域を選択し、授業実践を行い「分かる授業」に取り組むようにした。

## (3) 方法（研修の流れ）

下記のPDCAサイクルの流れに基づき、ICT活用をした授業づくりに取り組む。②～⑤の研修を2～3回繰り返し、授業の検討や改善を行うようにした。

- ① 提供授業の決定  
提供授業について、授業の回数や日時等、また授業設計や授業検討に日時等も決めておく。
- ② 班での授業設計（Plan（計画）：実態把握に基づく具体的な目標設定の在り方）
- ③ 班で話し合い、計画する。目標達成のために、ICT機器の選択や活用方法等を検討し、授業を組み立てる指導略案を作成し、教材教具の準備を行う。
- ④ 授業提供・授業参観（Do（実施）：主体的な活動を促すための工夫や言語活動の充実の工夫）  
授業を行う。指導案に基づき提供授業を行う。他の職員は、授業を参観し、よかった点や課題等について授業参観・検討シート（資料2）に付箋にて意見を述べようとする。
- ⑤ 授業検討会（Check（評価）：児童生徒の学習評価と教師の指導の評価の在り方）  
授業者以外は可能な限り参観し、評価する。授業後、ワークショップ型にてグループで意見を出し合ったり、授業参観・検討シートの付箋の意見を参考にしたりして述べようとする。
- ⑥ 授業改善（Action（改善）：授業改善のための効果的な授業参観と授業検討会の在り方）  
改善点等を班で話し合い、次の授業に生かすために、具体的な活用方法等を検討する。

## (資料2) 授業参観・授業検討用シート

( ) 班 平成 年 月 日

	よかった点	課 題	改善策
授業者の視点			
参観者の意見			
検討内容		改善点	

## (4) 研修日程

	具体的な内容
平成 2 7 年度	① 「見える校内放送」やタブレットパソコン・電子黒板の使用方法についての共通理解。(4月) ② 授業実践グループ(国語・算数班/音楽・体育班/生活単元学習班)での「教師による ICT 活用の視点」を取り入れた教材作成・授業実践(各班3・4回)。(5月～1月) ③ 研究1年目の成果と課題を協議・年間のまとめ。(2・3月)
平成 2 8 年度	① 研究1年目の成果と課題を踏まえた2年目の研究の検討。(4月) ② 授業実践グループ(算数班/体育班/生活単元学習班)での「児童による ICT 活用の視点」を取り入れた教材作成・授業実践(各班3・4回)。(5月～1月) ③ 他の教材と ICT 機器の並行した教材作成・授業実践。(5月～1月) ④ 九聴研沖縄大会に向けての準備。(8～11月) ⑤ 研究2年目の成果と課題を協議・年間のまとめ。(2・3月)
平成 2 9 年度	① 研究2年目の成果と課題を踏まえた3年目の研究の検討。(4月) ② 各学年や教科での ICT 活用の視点の選択と実践。(5月～2月) ③ 教材の共有化に向けた環境作り(6月と11月に教材作成し、授業実践に取り組む。) ④ 九聴研鹿児島大会に向けての指導案・教材作成等の準備。(7月～10月) ⑤ これまで作成した教材データを「見える校内放送」に各学年・各教科で共有化。(1・2月) ⑥ 研究の成果と課題のまとめ。(2・3月)

#### 4 平成27年度の研究の実際

##### (1) 国語・算数グループ

##### ア 授業I (国語「ごんぎつね」)

##### (7) 授業設計

タブレットの「書き込むことができ、すぐに提示できる」という特性を活かして児童の話し合いの手掛かりとして用いる。児童が根拠を基に友達と話し合うという活動のために、どの文章から考えを導き出したのかをタブレットで書き込みながらテレビに提示することで、児童同士の話し合いを深めることができると考えた。

##### (4) 提供授業

第4学年 国語科学習指導略案		日時：10月14日(水) 3校時	
		対象・場所：4年1組2人・4-1教室	
		指導者：早田 誠 紀	
1 単元名 「読んで考えたことを話し合おう(教材「ごんぎつね」光村図書4年下)」			
2 ICT活用の意図			
<ul style="list-style-type: none"> <li>児童の交流の場で根拠となる文章を提示し、どの文章を指しているのかを視覚的に分かりやすくするため。</li> </ul>			
(ウ)			
※ 下記の表のア～クの視点に基づいて記述する。( ) 内に記号を記入する。			
教員によるICT活用(各教科の目標達成)		児童生徒によるICT活用(情報活用能力育成)	
ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用	オ 情報を収集したり選択したりするための活用	
ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用	エ 学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用	カ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用	
		キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用	
		ク 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用	
3 本時(8/14)			
(1) 本時の目標			
<ul style="list-style-type: none"> <li>叙述を基に根拠を持って登場人物の気持ちを想像して読み取ることができる。</li> </ul>			
(2) 指導に当たって			
<ul style="list-style-type: none"> <li>テレビに映し出した本文にタブレットで根拠となるところに線などを書き込むことで視覚的に分かりやすくし、友達との交流を図る。</li> </ul>			
(3) 実際 ※指導上の留意点(☆ICTを活用する場合について ・その他の留意点について)			
過程	時間	主な学習活動	指導上の留意点
導入		1 前時までの話を確認し、今日のめあてを立てる。 うなずいたときのごんの気持ちを考えよう。	・ 本時の見通しを立てられるようにする。
展開		2 音読し、登場人物の気持ちや行動が分かる文章に線を引く。 3 ごん日記を書き、発表する。	・ ごんと表十の言動を色分けし、お互いの関わり合いを色で見やすくする。 ・ 第8場面のごん日記を書き、登場人物の気持ちを読み取ることができるようにする。
終末		4 最後の場面でのごんの気持ちを考え、考えた根拠を発表する。 5 本時の学習を振り返り、次時の学習の見通しを立てる。	☆ 発表した根拠となる部分をタブレットで提示し児童同士の交流で視覚的に示せるようにする。

##### (7) 授業検討

児童の考えを書き込むことができ、視覚的に話し合いの跡を残せたのは効果的であった。また、前時で用いたスライドをすぐに出して振り返りができたことも、児童の思考の手掛かりとなった。反省としては、1単位時間の学習の跡は残せたが、授業のつながりを持たせるための工夫が必要であるという意見が出た。ICTで用いたスライドをそのまま学級掲示として残せたら、日常的に見ることができるようになるので、書き込んだものを掲示したほうが良いと考えられる。ICTのみを用いるだけではなく、掲示物や板書などのアナログの手法と織り交ぜて用いることでさらに効果が期待できると考える。

イ 授業Ⅱ（重複算数「たしざんのひっさん」）

(7) 授業設計

ブロックを用いた具体的操作と位取り表を対応させ、筆算を理解できるようにするため ICT 機器のシミュレーションで確認を行う。画面に注視させることができ、繰り上がりの筆算の概念についてイメージを持って理解できるようにしたいと考える。教材はインターネット上の物を作り替え、本時の学習に合った物を準備する。

(4) 授業提供

第3学年 算数科学習指導略案

日 時：11月27日（金）3校時  
対象・場所：3年2組2人・リズム室  
指 導 者：豊田 上村

1 単元名 「たしざんのひっさん」

2 ICT 活用の意図

- ・ たし算の筆算のしかたをシミュレーションし、児童の思考や理解を深めるために活用する。(ウ)
- ・ いろいろな筆算のしかたを毎時間同じパターンで確認することで、見通しをもって課題をつかませるために活用する。(イ)
- ・ (1桁) + (1桁) の計算に慣れるために、フラッシュカードを活用する。(エ)。

※ 下記の表のア～クの視点に基づいて記述する。( ) 内に記号を記入する。

教員による ICT 活用 (各教科の目標達成)	児童生徒による ICT 活用 (情報活用能力育成)
ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	オ 情報を収集したり選択したりするための活用
イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用	カ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用
ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用	キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用
エ 学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用	ク 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用

3 本 時 ( 7 / 16 )

(1) 本時の目標

- ・ (2位数) + (2位数) で、百の位に繰り上がる筆算の計算ができる。

(2) 指導に当たって

- ブロックと位取り表と筆算を対応させて掲示し、理解を深めさせる。
- 縦に位をそろえて書くことや書く順番、繰り上がりに気をつけて、計算ができるようにする。

(3) 実際 ※指導上の留意点 (☆ICTを活用する場合について ・その他の留意点について)

過程	時間	主 な 学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入	10	1 前時の学習を振り返る。 ・ たし算のフラッシュカードをする。 ・ 繰り上がりの筆算のしかたを確認する。	<b>ICT</b> ☆フラッシュ型教材・プレゼンでは、指を使わないで計算させるようにする。
展開	25	2 問題文を読む。	・ 指文字や手話でしっかり読んで意味を確認するようにする。
		3 本時のめあてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">74 + 65 のひっさんのしかたをかんがえよう。</div>	<b>ICT</b> ☆めあてを掲示する。
終末	10	4 ブロック等を使って、自力で考える。	☆ブロックの移動や筆算の仕方のシミュレーションを見て、イメージをつかみやすくする。
		5 筆算のしかたを確認する。	・ 位をそろえることや百の位への繰り上がり分かり、計算することができるようにする。
		6 練習問題を解く。	

(7) 授業検討

まず、授業の始めにフラッシュカード（パワーポイントで提示）による計算の練習を行い、速く正確に計算ができるように取り組んだ。毎時間続けることで、児童も計算に慣れ、時間を意識しながら向上心をもって取り組んでいた。児童が手元で具体的操作をしたあとに、パワーポイントでシミュレーションを見せることで児童は興味・関心を持つとともに一つ一つの手順を確認することができた。また、教師が操作を見せるときに短時間でスムーズにシミュレーションを見せることができ、繰り返し示すこと

ができるため児童の理解の手掛かりとなったと考える。反省としては、パワーポイントを用いて授業を行ったが、パワーポイントだけではなく、板書として残せるように工夫する必要があった。学習する場所がリズム室ということもあり、板書を残すには難しい場所でもあった。ICTを主に授業をしていたが、全ての場面で使うのではなく、ねらいを決めて使った方がよいという意見があった。また、インターネット上のものを改善工夫して教材を作ったが、もとにするものの操作方法が難しいこともあるため、教材作りに時間がかかった。そのため、データを蓄積し、だれでも使うことができるように環境を整えることが必要である。

ウ 授業Ⅲ (算数「量と単位」)

(7) 授業設計

既習内容の復習として用いる。単位変換表を提示し、答えの確認ができるようにするとともに単位変換表の規則に気付かせるようにする。画面に表示されているものをもとに自分の考えを発表し、その根拠となるところを示すことができるようになることが期待できる。

(1) 授業提供

第6学年 算数科学習指導略案		日 時：1月21日(木)4校時 対象・場所：6年1組1人・教室 指 導 者：有川 香 織	
1 単元名 「量と単位」			
2 ICT活用の意図			
<ul style="list-style-type: none"> <li>面積や長さの単位の関係を視覚的に提示することで児童の思考や理解を深めたり、学習のまとめの際に提示することで児童が本時の学習を分かりやすくまとめたりすることができる。(ウ・キ)</li> </ul>			
※ 下記の表のA～Kの視点に基づいて記述する。( )内に記号を記入する。			
教員による ICT 活用 (各教科の目標達成)	児童生徒による ICT 活用 (情報活用能力育成)		
ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	オ 情報を収集したり選択したりするための活用		
イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用	カ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用		
ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用	キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用		
エ 学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用	ク 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用		
3 本 時 (2/7)			
(1) 本時の目標			
<ul style="list-style-type: none"> <li>面積の単位について、長さとの関係を理解し、関係をまとめることができる。</li> </ul>			
(2) 指導に当たって			
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 本児が長さ、面積についてのイメージをつかんでいないので、実物大を提示する。</li> <li>○ 面積の単位の関係を表にまとめ、視覚的に関係を捉えやすくする。</li> </ul>			
(3) 実 際 ※指導上の留意点(☆ICTを活用する場合について ・その他の留意点について)			
過程	時間	主 な 学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入	5分	1 前時(長さの単位)の学習を振り返り、学習問題を知る。 面積の単位の関係を探ろう。	・ マイクの作動状態を確認する。 ☆ 前時のまとめを見ながら長さの単位の関係を言語化できるようにする。
展開	30分	2 解決の見通しをもつ。 3 問題解決に取り組む。 (1) 面積の単位を思い出し、広さ順に並べる。 (2) 関係を表にまとめ、気付いたことを伝える。	・ 1cm <sup>2</sup> 、1m <sup>2</sup> は実物大を用意し、量感を感じることができるようになる。 ☆ 正方形の1辺の長さと面積の単位とを対応させ、それぞれの関係を理解できるようにする。
終末	10分	4 練習問題に取り組む。 (1) 単位換算をする。 (2) 面積の種類に応じて単位を選ぶ。 5 本時の学習についてのまとめをする。  ○ 正方形の1辺の長さが10倍になると面積は100倍になる。 ○ 面積の単位は長さとは関係している。	・ 前時に作った単位換算器を使って確かめられるようにする。 ・ 日常生活を考えたり、その広さを想像したりできるよう言葉掛けをする。

(ウ) 授業検討

ICT機器の不具合のせいで使用できないことがあったので、臨機応変にその他の手立てに変えることも必要である。

量感がイメージしづらい児童に対して、実物を用いての経験を想起させたり、教室で体感できるものは実物を用意したりして量感をつかませようとした。ICTの用い方として、教室内で体験できない大きな単位の量（畑の面積など）を視覚的に示すことが有効であると考えられた。

また、授業Ⅱまでの反省として挙げられた課題である①ICTの情報は授業ごとに残らない情報であるため、学習の跡を掲示として残すこと②複雑なアニメーションなどを作ると準備に時間がかかりすぎるため、授業の中で使いどころを精選し、複雑すぎない使用の仕方をする。などを解決できるように取り組んだ。授業Ⅲでは単位変換表をパワーポイントを使用し、提示することで、授業の視覚支援としても、ワークシートとしても、事後の学級掲示としても用いることができた。さらに、導入での復習と展開での確認という場面を選んで用いたため、準備にも負担がかからずに授業を行うことができた。

エ 成果と課題

(ア) 成果

- ・ タブレットを用いて、本文中のキーワードに色を付けたり、書き込んだりすることで、児童同士の話し合いの手掛かりとなった。
- ・ パワーポイントを用いた算数のシミュレーションを繰り返し見せることで、筆算の繰り上がりをイメージし、理解を深めることができた。
- ・ 繰り返しの操作を行うことで、反復が必要な児童は理解を深めることができた。
- ・ 単元を通して同じ場面でICTを用いることで、見通しを持って活動に取り組んでいた。
- ・ 授業でICTを用いるだけでなく、ワークシートや学級掲示へ同じ形式で使うことができる。
- ・ 提示された資料を基に考えを発表させることで、児童の説明する能力を高めることができる。

(イ) 課題

- ・ ICT機器で提示するだけでなく、単元を通じた学習の跡を掲示する。
- ・ 授業の中の使いどころを精選し、板書や他の教材とのバランスを考える必要がある。
- ・ ICTの教材を蓄積し、誰でも使用できる環境を整える必要がある。
- ・ 不具合を想定し、臨機応変に対応する。
- ・ 児童によるICT活用の方法を考え、実践していく。

(2) 音楽グループ

ア 授業Ⅰ（音楽「3拍子のリズムを楽しもう」）

(7) 授業設計

ICT活用として動画をカラオケとして活用したり、楽譜を大画面に写したりして指導するなどの方法を考えた。また、頭の中のイメージを視覚化できるような白版ソフトの活用を考える。しかし、ICTだけに頼らず、アナログも大切にしながら授業を組み立てるようにする。

(4) 授業提供

第2・3学年 音楽科学習指導略案		日 時：11月6日（金）5校時	
		対象・場所：2・3年生・リズム室	
		指導者：下家・竹下・豊田・川畑	
1 単元名	「3拍子のリズムを楽しもう」		
2 ICT活用の意図	<ul style="list-style-type: none"> <li>3拍子の拍の流れやリズムの作り方、強弱の取り方等を分かりやすく提示する際に活用する。（ウ）</li> </ul> ※ 下記の表のA～Kの視点に基づいて記述する。（ ）内に記号を記入する。		
<b>教員によるICT活用（各教科の目標達成）</b> ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用 イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用 ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用 エ 学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用		<b>児童生徒によるICT活用（情報活用能力育成）</b> オ 情報を収集したり選択したりするための活用 カ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用 キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用 ク 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用	
3 本 時（ 1 / 4 ）			
(1) 本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>3拍子のリズムの仕組みが分かり、リズムを作ることができる。</li> </ul>		
(2) 指導に当たって	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 同じリズムが繰り返されていることや強弱があることに気づかせる。</li> <li>○ 3拍子のリズムを自分たちで作ることで、拍の取り方の理解を深めさせる。</li> </ul>		
(3) 実 際	※指導上の留意点（☆ICTを活用する場合について ・その他の留意点について）		
過程	時間	主な学習活動	指導上の留意点
導入	10	1 本時の活動を確認する。 ・季節の歌「虫の声」 ・活動「リズムあそび」	ICT ☆カラオケの活用
展開	15	2 季節の歌をうたう。 ・「虫の声」をカラオケに合わせて歌う。	・虫の名前となき声を一致させるように、画像と名前を提示する。
	10	3 リズムあそびをする。 ・3拍子のリズムを作り、友達の作ったリズムをたたいてみる。	ICT ☆ペンソフトの活用
終末	5	4 リズム伴奏を作る。 ・グループでリズム伴奏を作る。 ・3拍子のリズム伴奏を作り、2つに分かれて、リズムを練習する。	・3拍子のリズム作りを、視覚化することで、共通のリズム打ちをすることができる。 ・グループにワークプリントを用意する。 ・リズム伴奏を2つに分かれて作り、友達の作ったリズムを練習する。
	5	5 終わりの挨拶をする。	・1拍目は音の大きい楽器、2拍目3拍目は小さい楽器など、使用する楽器を工夫させるようにする。

(7) 授業検討・改善

虫の声をカラオケで流したが、鳴き声や虫の写真などは事前に文字に表したり、写真を提示したりした。アナログもあわせて、活用していて良かった。また、1小節の中に四分音符が3つ入ることが、四分の三拍子であることを、白版ソフトを使って説明し、実際に音符を動かすことで理解を促すことができた。

しかし、授業内容を3拍子の強弱についても触れたが、操作に戸惑うこともあり、中途半端になって

しまった。

イ 授業Ⅱ（音楽「リズムアンサンブル 音の重なるの縦を意識しよう」

(7) 授業設計

引き続き ICT 活用として動画をカラオケとして活用を行う。さらに、タブレットを用いた活用方法として前時の復習を行ったり、参加できなかった児童と学習内容を共有したりすることができる方法を考え、実践する。しかし、ICTだけに頼らず、実演やアナログも大切にしながら授業を組み立てるようにする。

(1) 授業提供

第4・5・6学年 音楽科学習指導		日 時：12月11日（金）5校時 対象・場所：4・5・6年生 音楽室 指導者：岩下・久留・山口・四元 大津・伊勢・有川・早田	
1. 単元名 「リズムアンサンブル 音の重なるの縦を意識しよう」			
2. ICT活用の意図			
<ul style="list-style-type: none"> <li>前時のふりかえりや内容を全体で共有する際に活用する。(ウ)</li> </ul>			
※ 下記の表のA～Kの視点に基づいて記述する。( ) 内に記号を記入する。			
教員によるICT活用（各教科の目標達成）	児童生徒によるICT活用（情報活用能力育成）		
ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	オ 情報を収集したり選択したりするための活用		
イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用	カ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用		
ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用	キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用		
エ 学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用	ク 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用		
3. 本時（4/4）			
(1) 本時の目標			
<ul style="list-style-type: none"> <li>4分の4拍子のいろいろなリズムをぴったりと重ねるための工夫を考えて、体で表現することができる。</li> </ul>			
(2) 指導に当たって			
<ul style="list-style-type: none"> <li>音符の長さを言葉で意識しながら、一定の速さでリズムを重ねられるように拍の頭に意識する大切さに気付かせる。</li> <li>友達とのリズムの重なりを楽しめるように、音の重なるの縦を意識する工夫を考えさせる。</li> </ul>			
(3) 実 際 ※指導上の留意点（☆ICTを活用する場合について ・その他の留意点について）			
過程	時間	主 な 学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入	5	1 本時の活動を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>季節の歌「冬景色」</li> <li>活動「リズムアンサンブル」</li> </ul> </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ICT</div> ☆カラオケの活用
展開	10	2 季節の歌をうたう。 ・「冬景色」をカラオケに合わせて歌う。	動画を見てから1回歌い、どんなことをイメージしながら歌うと歌が生きるか発表しあう。→もう一度歌
	15	3 リズムアンサンブルをする。 ・先々週のDVDを見る。 ・先週の様子を動画で見る。 ・気付いたことを発表し合う。 ・全員でリズムアンサンブルをする。	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ICT</div> ☆DVDの活用 ☆タブレットの活用 ・リズムアンサンブルを視覚化することで、音の重なりやリズム（動き）のタイミングが同じ人いることに気付くことができる。 ・グループにワークプリントを用意し、同じ重なりを定規でひき、確認する。 ・一定のスピードで自分たちで、ぴったりとあわせられるように練習をする。
終末	10	4 他のリズムにも挑戦する。 5 終わりの挨拶をする。	

(7) 授業検討・改善

前時の反省で上がっていたカラオケを上学年でも活用した。イメージを共有することができた点はよ

かったが、上学年では言葉が難しく、漢字も出てくるため補助として指文字なども使う必要がある。また、DVDを用いて映像を見たが、教員による実演もあり、児童が関心を持ち、ひきこまれていた。

タブレットを用いて、前時の復習を行う予定だったが、機器が止まってしまい、授業が中断してしまうことがあった。

#### ウ 成果と課題

##### (7) 成果

- ・ 準備が少なく、全体ですぐにイメージを共有することができるという点では、活用する有効性を見出した。
- ・ 復習など前時に行ったことをすぐに共有したり、繰り返しみたりすることができることが分かった。
- ・ 演奏した内容を映像で確認することができるということが話にあがった。(授業Ⅱで行おうとしたが、機器が止まってしまった。)

##### (4) 課題

- ・ 課題点としては、機器が止まってしまうとそちらの対応に教員がとられてしまうところもあるので、ICT だけではなく、別の教材も準備しておく必要があると再確認した。
- ・ ICT を使いこなすようになるには、慣れることが必要である。

### (3) 生活単元学習グループ

#### ア 授業Ⅰ(生活単元学習「冬野菜を育てよう」)

##### (7) 授業設計

授業においては、基本的に口話に併せて、手話や指文字、身振りなどを用いて進めているが、児童の口話の聞き取りや口形の読み取り力、また手話の理解力、語彙力については、実態差が大きい。そのため、具体物や写真、絵カードなどを提示したり、黒板やホワイトボードに言葉や絵で表現して示したりするなど、一定時間留めておくことができる視覚情報の提示が、学習課題や発問等の理解を促すためにとても重要となる。そこで、ワークシートやしおり、絵や写真カードの活用や具体物の提示、板書などを効果的に組み合わせることで、学習への興味・関心を喚起したり、学習課題や思考の道筋を明確にしたりすることに努めている。

本授業の単元は、「冬野菜を作ろう」という内容であり、既習の「夏野菜を作ろう」を振り返りながら、今後の学習活動への見通しをもたせることをねらいとしている。

「夏野菜を作ろう」の振り返りにおいては、児童が育てた野菜を実際に見たり触れたりすることで、より効果的に想起させることにつながれると思われるが、季節の野菜であるため準備が容易でないものもあつたり、生ものであるため、準備する時期を考慮する必要があつたり、日にちをあけて繰り返し学習に使用することが難しかったりするという課題がある。また、苗から実までの育てていく過程の様子や、どのように世話をしてきたかの児童の様子などを具体的に示すことは困難である。そこで、そのような難しい点において、ICT を活用することにより、具体物では足りない視覚情報をも効果的にそして効率よく提示することができる。そのことにより、より容易に既習の学習事項を想起させたり、これからの学習への見通しをもたせたりすることができると考えられる。

主に、自分たちが育てた野菜や成長過程の様子、世話をしている時の様子を提示したり、発問を図式化したりするなどして、スライドで順次示していくことで、今何について話題にしているのかの焦点化を図ったり、発問の答えが入る空欄を示すことで、まわりの視覚情報から容易に答え導き出せるようにしたり、学習の思考の筋道を示したりしていく。このように ICT を活用して学習を展開していくことで、より学習への理解が深められるのではないかと考える。

(4) 授業提供

生活単元学習学習指導略案

日 時：平成27年10月13日(火) 3・4校時  
 対象・場所：2・3・4・5・6年2組 9人・リズム室  
 指導者：大津 四元 山口 伊勢 豊田 川畑

1 単元名 「冬野菜を育てよう」

2 ICT活用の意図

- ・ 「夏野菜を育てよう」での学習を振り返り、学習のイメージをもたせやすくするため。…(ア)・(ウ)
- ・ 「冬野菜」のイメージをもたせ、何を育てたいかの選択に活用するため。…(ア)・(ウ)

※ 下記の表のアーチの視点に基づいて記述する。( )内に記号を記入する。

教員によるICT活用(各教科の目標達成)	児童生徒によるICT活用(情報活用能力育成)
ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	オ 情報を収集したり選択したりするための活用
イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用	カ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用
ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用	キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用
エ 学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用	ク 振り返り学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用

3 本時 (1・2/12)

(1) 本時の目標

- ・ 「夏の野菜を育てよう」の学習を振り返り、学習の見通しをもち、自分が何の野菜を育てたいかを選択することができる。

(2) 指導に当たって

- 「夏野菜を育てよう」の学習の振り返りを通して、活動のイメージをもたせるようにする。
- 振り返りや選択においては、自分の考えを発表したり、他の人の発表を聴いたりする場面を設け、自語活動の充実を図るようにする。

(3) 観察 ※指導上の留意点(☆ICTを活用する場合について ・その他の留意点)

過程	時間	主な学習活動	指導上の留意点
導入	10分	1 本時のめあてを確認する。 何の冬野菜を育てるか決めよう!	・ 学習への意欲を高められるようにする。
展開	70分	2 「夏野菜を育てよう」の学習を振り返る。 3 どんな冬野菜があるかを知り、自分が育てたい野菜を決める。	☆ 夏野菜の写真を示し、自分がどんな夏野菜を育てたか、また収穫はどうだったかを思い出すことができるようにする。 ☆ 冬野菜の写真を示し、どんな冬野菜があるかを知らせ、何の冬野菜を育てたいかを自分で選択することができるようにする。
終末	10分	4 次時の学習の確認をし、野菜栽培や収穫への意欲を高める。	・ 次時の学習への見通しをもつことができるようにする。

(5) 授業検討

ICT(パワーポイント)の活用により、情報を細かく必要な分ずつ提示したり、思考の流れを段階的に示したりすることができるため、今取り組んでいる課題が何なのか、また、何を答えればいいのかなど、今取り組むべき事項を焦点化することができ、児童が何をすべきか理解した上で学習課題に取り組むことができていた。

また、授業者としては、授業の流れや、教師の発問と予想される児童の答えなどを考えながら、前もってパワーポイントのシートを作成していくため、児童の実態把握や授業の細かい流れの把握ができ、児童一人一人のねらいや、支援の手立て等をより深く考えることにつながった。

一方で、説明や発問事項、答えを導くための視覚情報に、随時、注意喚起を図るための効果的なアクションをつけ、そして細分化して提示していくため、前に使用したシートを提示したい場合、その場面をピンポイントで表示することが難しく、今まで表示したものを順次遡っていく必要があった。そのため、その

時点では不必要な情報をも児童たちは目にしていかなければならない状況が起こった。前時点では有効であった情報でも、児童によっては、その再提示がかえって思考の混乱につながることもなりかねるので、以前示したシートを再提示する場合は、必要な個所で提示できるようにシートの作り方や再提示方法を考える必要がある。

また、パワーポイントであったため、提示するシートが固定的であった。必要に応じて記入ができたり、表示してあるものの移動ができたりするなど、状況に応じてより効果的な情報提示ができるように工夫していく必要がある。

## イ 授業Ⅱ（生活単元学習「買い物に行こう」）

### (7) 授業設定について

授業Ⅰでは、単元「冬野菜を育てよう」の導入の授業で、電子黒板を使いながら、写真などの視覚情報の提示を行い、児童の野菜栽培への興味・関心を高め、今後の学習活動への見通しをもたせることができた。

今回の授業Ⅱでは、単元「買い物にいこう」の導入の授業で、児童に配付したしおりを電子黒板で提示し、それに書き込みながら授業を進め、教員による ICT 活用と児童による ICT 活用を行う。

教員による ICT 活用においては、今回の学習で使うしおりや関係する施設の写真を、児童の思考活動を活発にし、学習の理解をより深めていくための視覚情報として提示していく。自分たちのこれまでの生活経験を振り返ることで、これからの学習が、これまでの自分たちの生活経験と密接に結びついていることが理解でき、児童の学習に対する興味・関心を高めることにつながれると考える。

本時の学習においては、身近にある店を、クイズ形式で考えさせたり発表させたりすることで、これからの学習でどんな店に行くのかの期待感をもたせたり、学習課題を明確につかませたりすることを重点事項とする。

また、児童による ICT 活用においては、児童に配付したしおりと同じものを電子黒板に提示し、児童に記入させることで、みんなに分かりやすく発表できるようにする。また、既習単元の「町探検に行こう」で確認した約束事を振り返ることで、見学をするときのルール<sup>(1)</sup>の定着を図る。

### (4) 授業提供

生活単元学習学習指導要案	
日 時：平成27年12月2日（火）2・3校時	
対象・場所：2・3・4・5・6年2組 9人・リズム室	
指 導 者：川畑、四元、豊田、伊勢、山口、大津	
1 単元名 「 買い物にいこう 」	
2 ICT活用の意図	
<ul style="list-style-type: none"> <li>交通公共機関の使い方や買い物に行く場所など活動に対するイメージを深めるため。…（ウ）</li> <li>持ち物や安全面などを確認したり、使用する交通機関や目的地の写真等を見せたりすることで関心・意欲を高めたり、持ち物の名前を電子黒板に記入し、みんなの前で発表したりするため。…（ア）（キ）</li> </ul>	
※ 下記の表のゾーンの視点に基づいて記述する。（ ）内に記号を記入する。	
教員によるICT活用（各教科の目標達成）	児童生徒によるICT活用（情報活用能力育成）
ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	オ 情報を収集したり選択したりするための活用
イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用	カ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用
ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用	キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用
エ 学習内容をよとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用	ク 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用

### 3 本時 (1・2/8)

#### (1) 本時の目標

- ・ 買い物学習の日程やグループの友達について知り、見通しをもって持ち物や行き方などを確認することができる。

#### (2) 指導に当たって

- 「いつ、どこで、だれと」を電子黒板等で写真等を用いながら、プリントに書かせて確認を行なう。
- 「買い物に行く」ことが目的であることを意識できるように、どんな物が売っているのか、どんな店があるのか紹介しながら、買い物への意欲を高めることができるようにする。

#### (3) 実際 ※指導上の留意点(☆ICTを活用する場合について ・その他の留意点について)

過程	時間	主な学習活動	指導上の留意点
導入	15分	1 本時のめあての確認 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">みんなで買い物に行こう!</div> 2 身近な場所にどんな店があるか確認する。	☆ 去年の買い物の様子の写真等を見せることで買い物学習への意欲を高められるようにする。 ☆ 身近にある店の写真をクイズで確認して店への興味関心を高める。
展開	20分	3 しおりを配布し、持ち物やグループの友達の名前をプリントに記入する。 4 写真等を見ながら、どこでどんな物を買えるのかを知る。	☆ しおりを電子黒板に映し、書く内容を確認しながら記入し、誰と同じグループか、どこに行くかなどを知ることができるようにする。 ☆ TVでどんな店やどんな商品があるかなどを知り、買い物の場面を思い浮かべることができるようにする。
終末	5分	5 次回の活動の確認をし、買い物学習への意欲を高める。	・ 買い物の仕方や行き方などを確認し、次回の活動に見通しをもてるようにする。

#### (ウ) 授業検討

参観者からの良かった点の意見として、「電子黒板にも児童が使用するしおりと同じものの提示ができ、一緒にどこに行くか考えたり持ち物を確認できたりしてよかったこと」や「パワーポイントを利用することで店に関するクイズができ、児童が学習に対して興味・関心を持つことができたこと」が挙げられた。電子黒板に写真やイラストを提示することで、児童の学習への興味・関心がより高まり、学習活動に集中して取り組むことができた。また、電子黒板に提示される情報から、今、何をしているのかが焦点化され、児童にとってより分かりやすくなっていた。

改善点としては、児童が電子黒板に文字を書き込む際に、上手に書き込めなかった点が挙げられた。「電子黒板への文字の記入機能を、まだ児童が使い始めたばかりであるので、そのような経験を重ねていくことで要領をつかみ、自由に書き込みができるようになるのではないか。」という意見も出された。児童が、発表内容を電子黒板に記入することで、みんなに伝えたいことを見て確認しながら、ゆっくりと手話や指文字も併せて伝えるなど、分かりやすい伝え方を工夫して発表する様子が見られた。発表を見る側も、いろいろな視覚情報があることで、それらから得られた分かる部分の情報を結び合わせ、より理解を深めることができていた。児童による ICT 活用をより効果的にするためには、繰り返し児童と一緒に電子黒板を使う機会を設定していく必要がある。

#### ウ 成果と課題

##### (7) 成果

- ・ 情報の提示の仕方の工夫により、学習課題が焦点化され明確化することにより、児童の学習への興味・関心を高め、課題に対する思考や学習への理解が深まった。
- ・ 写真や絵などの提示が容易であり、児童の理解を助けたりイメージをもたせたりすることができた。特に、実物の提示が難しいものを提示したいときに、より有効性を発揮した。
- ・ ワークシートに児童が発表した答えを書き込んだり、児童の考えを児童の言葉で書き示したりすることで、自他の考え方の違いや良さに気づくことができ、より学習意欲を高めながら活動に取り組むことができた。

- ・ 一度に全員に分かりやすく提示することができるので、指導の効果を高めたり、効率化を図ったりすることができた。
- ・ 提示する情報を効果的なアクションをつけて表示することで、児童の注視を促し学習への集中が途切れさせないようにすることができた。
- ・ 今回の授業は2組合同の授業であったため、人数の関係からリズム室を使用した。この部屋は、主に集会等で使われる部屋であるため、黒板が設置されておらず、補助的に使用する小さなホワイトボードがあるだけである。そのため、多くの視覚情報の提示自体が、物理的に困難であった。このように黒板の設置のない部屋において、電子黒板やテレビ等の大型モニターの使用することで、多くの視覚情報を提示しながら、より分かりやすい授業を効果的に進めることができた。

#### (イ) 課題

- ・ ICT 機器の起動は不安定であり、時々表示できなかつたり、途中で動かなくなつたりすることがあるので、ICT に大きく頼った授業を計画していた場合、授業が成立しなかつたり、児童にとって分かりづらい授業になつたりする危険性がある。そういう場合に備えた教具の準備や指導計画が必要となれば、授業準備の手間がかえって増えてしまうことになる。
- ・ ICT 機器の数が限られているため、使いたいときにいつでも使用できるわけではないので、授業の計画や他との調整などの煩わしさがある。
- ・ ICT を使用した授業において、より効果を出すためには、教師と児童の双方が、ICT でできることを理解し、その活用に慣れることが必要になる。

#### (4) 平成27年度の研究成果と課題

##### ア 成果

「拡大して見せる」、「動きを見せる」、「画面に書き込む」、「繰り返す」など、各グループで、様々なICT活用をした授業を行うことができた。また、いろいろな活用方法を組み合わせることで効果的な活用ができ、児童の興味・関心が高まったり、活動や思考の理解が深まったりすることができたのではないかと考える。具体的には、色付けや書き込みをして要点を示すことで、話し合いや発表の際の手掛かりとなり言語活動を促したり、繰り返しの操作により反復学習に取り組むことで、学習の定着を図ったりすることができた。また、合同学習など人数の多い授業では、写真や絵、映像等を提示することで一斉にイメージを共有でき、重複障害学級においては、提示を工夫することで集中力の持続や注視を促すなど、授業の形態や学級の実態に合わせて、ICT を活用した授業が実践できた。また、一度教材を作成すると、その後の準備が少なくすむという利点も挙げられ、教材等の準備の効率化を図ることもできると考える。

##### イ 課題

ICT を有効に活用できたが、課題も見えてきた。一つ目に板書や他の教材等と並行した活用についてである。ICT による情報は短時間に多くを提示できるが、情報が児童の記憶に残らない場合がある。常に提示するもの、一過性の提示でよいものを用途に合わせて分け、役割に合った提示を検討する必要がある。

また、提供授業中に、機器が不具合により使えなくなることがあった。ICT の教材を準備する際には、不具合を想定して臨機応変に対応するために前もって準備をしておく必要がある。また、機器を運んだり、つないだりなど準備に時間が掛かってしまうことも課題に挙がった。効率化を図るためにも、ICT 教材の蓄積や機器の充実など、誰でも、いつでも、どこでも使用できる環境を整える必要がある。

最後に、ICT を活用した授業づくりに取り組んできて感じたことは、「ICT 活用に慣れる」ことが何よりも大切である。28年度は教師のICT活用については、慣れることを目指して継続して取り組み、さらに、今後は、児童によるICT活用の方法についても検討したい。

5 平成28年度の学部研修

今年度の研究では昨年度実施しなかった ICT 活用の視点における児童生徒による ICT 活用の視点を入れた授業実践を行った。そして、昨年度の課題として挙げられた ICT 機器を活用する際の板書や他の教材等と ICT 機器の並行した活用方法の検討を行い、「分かる授業」のための ICT 活用に取り組んだ。

(1) 算数グループ

ア 授業 I

(7) 授業設計

昨年度の ICT 機器を使用した授業において、ICT 機器の使用場面の精選と他の教材等と並行した活用方法を行うこと、さらに児童による ICT の活用の方法について検討を行うことが課題として残った。そこで、今年度は、児童による ICT 活用に重点を置きながら学習活動を行うことにした。また、昨年度の反省から、国語科での ICT 活用の難しさがあり、今年度は算数科に焦点を当てて授業設計を行った。

本単元「ひきざん(1)」(第1学年)の本時では、減法の場面を絵から読み取って式に表し、5以下の2数の計算をすることを目標としている。その中で、①課題の場面を捉えさせることができるように教師が場面の絵を視覚的に提示する。②児童が発表する際にタブレットの白板ソフトを使用し、操作しながら児童自身の考えを説明する。以上2つを ICT 機器の活用場面として設定し、児童の分かりやすく発表する力を高めたい。

(4) 授業参観

第1学年 算数科学習指導略案		日 時 : 6月15日(水)4校時
		対象・場所 : 1年1組 3人
		指導者 : 梅田 香織
1 単元名	「ひきざん(1)」	
2 ICT活用の意図	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題場面が明確につかめるように絵を表示する。(イ)</li> <li>タブレットで操作しながら、発表の手立てとして発表できるようにする。(キ)</li> </ul>	
※ 下記の表のA～Kの視点に基づいて記述する。( )内に記号を記入する。		
<b>教員による ICT 活用 (各教科の目標達成)</b> ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用 イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用 ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用 エ 学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用		<b>児童生徒による ICT 活用 (情報活用能力育成)</b> オ 情報を収集したり選択したりするための活用 カ 自分の考えを文章にまとめたり調べたことを表や図にまとめたりするための活用 キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用 ク 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用
3 本時(2/12)		
(1) 本時の目標	減法(求残)の場面を絵から読み取って式に表し、5以下の2数の計算をすることができる。	
(2) 指導に当たって	○ 減法(求残)の場面を絵からつかんだり、ブロックで操作したりするときは、言語化できるようにしたい。言語化できないときには、口声模倣で文章化し児童に言わせるようにしたい。	
(3) 実 際	※指導上の留意点(☆ICTを活用する場合について ・その他の留意点について)	
過程	時間	主な学習活動 指導上の留意点
導入	5	1 はじめのあいさつをする。 2 たし算の問題を解く。
展開	30	3 学習問題をつかむ。 (1) 絵を見て、おはなしをつくる。 (2) 「のこり」を求める問題であることを理解する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;">                     のこりをもとめるしきとこたえをかんがえよう。                 </div> 4 解決する。 (1) ブロックを操作し考える。 (2) しきとこたえを各自で考える。 ※ 3・4と同じ流れで2問解く。
終末	10	5 5以下の数のひき算をする。 6 終わりのあいさつをする。
		・ 集団補聴システムの確認をする。 ・ フラッシュカードを提示し考えるようにする。 ☆ タブレットで表示し、注目させる。課題を明確につかめるようにする。  ☆ 発表するときに、タブレットの白板ソフトを操作させながら説明できるようにする。

(9) 授業検討

授業者から、「機器を使うことに対しては、児童が積極的に使おうとする意欲が見られた」「画面の絵を見ることですぐにイメージができ、立式をすることができた」「自分の考えを説明する際に手がかりとして画面を見たり、操作したりすることができた」という反省があった。興味・関心を高めながら、問題をイメージ化し、課題をつかむことができたと考え。また、考えを説明するとき、機器の手がかりがあることで自分の考えを言葉にして伝えることにつながったと考える。

しかし、「1年生は児童の機器を使用する力が足りないため、具体物みの操作が望ましかった」という反省があった。低学年では具体物の操作を繰り返し行い、考えを深化していくことが大切である。ICT機器を用いることのマイナス面として、質量感が得られないという意見があった。授業の中で具体物の操作により、児童は減法の考え方を理解することができたため、発表場面でも具体物を用いて発表させても良かったのではないかと反省があげられた。そこで、タブレットではなく、書画カメラのような機器を用いて具体物を操作することが機器の使用に慣れていない児童には有効であると考えられる。

イ 授業Ⅱ

(7) 授業設計

授業Ⅰの反省から、具体物を用いた活動を入れながら、機器の操作に慣れつつある第6学年で児童によるICT活用のあり方を検討することにした。第6学年の児童はタブレット機器の操作に積極的であり、操作方法も大まかに理解している。そこで、機器の操作をしながら説明する力を伸ばしたいと考えた。

本単元「比例と反比例」(第6学年)の本時では、具体物の操作により、分かった情報を整理して考えることで、伴って変わる2つの量について、その増え方や減り方を考えることを目標としている。その中で、具体物の操作によって気付いたことをタブレットに書き込み、発表のためのスライドを作る。さらに、そのスライドを元に自分の考えを説明する力を高めることをねらいとした。

(1) 授業参観

第6学年 算数科学習指導略案		日 時：11月14日(月)3校時 対象・場所：6年1組 3人 指導者：早田 誠紀	
1 単元名 「比例と反比例」			
2 ICT活用の意図			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 比例の関係について視覚的に理解できるようにする。(ウ)</li> <li>・ タブレットで操作しながら、発表の手立てとして発表できるようにする。(キ)</li> </ul>			
※ 下記の表のア～クの視点に基づいて記述する。( )内に記号を記入する。			
教員によるICT活用(各教科の目標達成)		児童生徒によるICT活用(情報活用能力育成)	
ア	学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	オ	情報を収集したり選択したりするための活用
イ	児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用	カ	自分の考えを文章にまとめたり調べたことを表や図にまとめたりするための活用
ウ	分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用	キ	分かりやすく発表したり表現したりするための活用
エ	学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用	ク	繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用
3 本時(2/12)			
(1) 本時の目標			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 伴って変わる2つの数量について、その増え方や減り方を考えることができる。</li> </ul>			
(2) 指導に当たって			
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 具体物の操作で分かったことを表に示すことで児童に増え方や減り方に気付くことができるようにする。また、web上のコンテンツを用い、興味関心を持ちながら比例するものはどんなものがあるか考えることができるようにしたい。</li> </ul>			
(3) 実 際 ※指導上の留意点(☆ICTを活用する場合について ・その他の留意点について)			
過程	時間	主な学習活動	指導上の留意点
導入	5	1 はじめのあいさつをする。 2 学習問題をつかみ、めあてを立てる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">紙の束の枚数を求める方法を考えよう。</div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 集団補聴システムの確認をする。</li> <li>・ 実物を提示し、課題をつかめるようにする。</li> </ul>
展開	30	4 解決する。 (1) 紙の重さ、厚さを測って考える。 (2) 表にまとめる。  5 他にも比例するものについて考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ 測定結果を表に書き込み、板書することで量の変化に気付くことができるようにする。</li> <li>☆ 図形の面積について考えさせ、タブレットで図形の高さを操作し、発表できるようにする。</li> </ul>
終末	10	6 本時のまとめをする。 7 おわりのあいさつ	

(ウ) 授業検討

授業者から「児童が機器を用いることに積極的であり、発表すること対してもとても意欲的であった」「矢印等で書き込みをしながら提示することができ、発表をきく児童もどこの説明をしているか分かりやすかった」等の反省があった。6学年は機器を操作する能力も少しづつ身に付いており、さらに機器を活用することで情報活用能力を高めていくことができると考える。

一方、反省として「機器の準備や立ち上げ、接続等に時間がかかり、児童の思考を一回止めてしまっている」「授業の流れの中で児童がすぐに使うことができる環境が求められる」「児童が機器の使用にさらに慣れていかないと授業の中で日常的に使うには難しい」等があげられた。タブレット機器のみではなく、「ICT機器の活用」ということを幅広くとらえ、児童にとっても教師にとっても簡単に、日常的に使うことができる方法を検討する必要がある。

エ 授業Ⅲ

(ア) 授業設計

授業Ⅰ、Ⅱの授業で ICT 機器を用いることで児童の発表や説明の手がかりとすることができた。この使用方法以外にも児童による ICT 機器の活用を検討した。そこで、フラッシュによる繰り返し学習で、知識の定着ができるように児童が活用することをねらいとした授業を検討した。

本単元「分数」(第4学年)の本時では、図の操作などにより、分数の引き算の仕方を考え、児童が計算できるようにする。まとめの後に、児童一人ずつにタブレットのフラッシュカードを用い、計算の補充問題を与えることでさらに知識や技能の定着ができるのではないかと考えた。また、算数用語の確認を文章の穴埋め問題として取り組むことで、語句の定着も図れるのではないかと考えた。

(イ) 授業参観

第4学年 算数科学習指導略案		日時：1月23日(月)3校時 対象・場所：4年1組 2人 指導者：豊田佳織	
1	単元名 「分数」		
2	ICT活用の意図	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科書を拡大表示し、問題場面を明確につかめるようにする。(イ)</li> <li>分数のフラッシュカードを使い、繰り返し学習することで、分数の用語や計算の定着を図ることができるようにする。(ク)</li> </ul>	
※ 下記の表のア～クの視点に基づいて記述する。( ) 内に記号を記入する。			
教員による ICT 活用 (各教科の目標達成)		児童生徒による ICT 活用 (情報活用能力育成)	
ア	学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	オ	情報を収集したり選択したりするための活用
イ	児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用	カ	自分の考えを文章にまとめたり調べたことを表や図にまとめたりするための活用
ウ	分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用	キ	分かりやすく発表したり表現したりするための活用
エ	学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用	ク	繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用
3	本時(2/12)		
(1) 本時の目標			
<ul style="list-style-type: none"> <li>同分母分数の(真分数)－(真分数)や(帯分数)－(帯分数)で、繰り下がりのない場合の計算をすることができる。</li> </ul>			
(2) 指導に当たって			
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ タブレットを用いて、自ら分数のフラッシュ学習を進めることで、意欲をもって分数の学習に取り組めるようにする。</li> </ul>			
(3) 実 際 ※指導上の留意点(☆ICTを活用する場合について ・その他の留意点について)			
過程	時間	主な学習活動	指導上の留意点
導入 展開	3 30	1 はじめのあいさつをする。 2 学習問題①を確認し、めあてを立てる。 (真分数)－(真分数)の計算のしかたを考えよう。 3 解決に取り組む。 図を手がかりとして、問題の意味をつかむ。 4 学習問題②を確認し、めあてを立てる。 (帯分数)－(帯分数)の計算のしかたを考えよう。 5 解決に取り組む。 図を操作して、計算のしかたを考える。	☆ 教科書を拡大表示し、問題をつかむことができるようにする。 ・ 図を用いて、具体的にイメージできるようにする。
終末	12	6 本時のまとめをする。 7 教科書たしかめようの問題を解く。 8 タブレットで問題を解く。 9 終わりのあいさつをする。	☆ タブレットによるフラッシュカードで、分数の学習を子ども自身で進めることができるようにする。

(ウ) 授業検討

授業者から「語句を穴埋めにすることで児童自身が楽しみながら語句を覚えることができた」「タブレットのフラッシュカードにより、繰り返して問題に取り組めるため、計算の方法等を確認することができた」「児童の進度に差があるときに、個別に課題を渡すことができるので、個に対応した指導ができた」等の反省があった。

一方で、フラッシュを製作するのに時間がかかるため、データを学部全体で共有できる体制作りを行うべきではないかという反省があった。学年や教科、単元ごとに細分化し、データを蓄積して共有していきたい。

エ 成果と課題

(ア) 成果

児童が機器に触れて実際に使用することで、学習への意欲が高まり、関心を持って授業に参加することができた。ICT機器を操作する経験を積むことで、機器の活用能力が高まり、授業の中でスムーズに操作ができるようになってきている。

また、児童が発表や考えの説明をする際に、発表の手がかりとしてICT機器を用いる有用性が感じられた。口答だけの説明では発表する児童も上手く文章で伝えることが難しいが、タブレットで操作をしながら発表をすることで、順序立てて考えを整理し、発表することができた。また、発表をきく児童も視覚的に示してあることで発表の内容を理解しやすかったと考えられる。

さらに、フラッシュ教材としての使用の仕方では、児童が自分で操作しながら繰り返し計算や語句の確認をするので、楽しみながら知識や技能の定着を図ることができた。また、児童の進度に差があるときに、タブレットで補充問題に取り組みせることで、理解を深めるとともに、個に応じた指導をすることができた。

(イ) 課題

ICT機器を使用するときに児童の発達段階や能力を考えながら適切な場面を検討すべきである。児童の活用能力が未発達な段階で使用してしまうと、操作することが授業の中心となってしまう、本来のねらいから外れてしまうことがあった。また、低学年段階では、量感を感じる事が重要な学習活動として位置づけられているため、実物の操作が有効な場合は実物での学習が望ましいと考えられる。教室内で体験できない量を視覚的に示すことや動きのある物を繰り返し動画で見るなどの学習活動に使うことが有効であると考えられる。

また、教材の製作に教員の知識や技能が必要となり、準備に時間がかかることから、学部全体で授業に使用する教材データを共有する体制作りを行うべきではないかという反省が挙げられた。学年、教科、単元で細分化し、データを蓄積していくことで教材を自由に使用できる環境をつくっていききたいと考える。

(2) 体育グループ

ア 授業 I (5, 6年生体育「マット運動」)

(7) 授業設計

展開部では挑戦したい技に応じて、3人グループを編成する。タブレット端末を用いて児童同士で技を撮影する。動画を見返し、静止画像にして手や足、体の向きがどうなっているのか自分で確認できるようにする。また児童同士で見合うことで、良い点を共有する。また、終末部では、大型スクリーンを用いて全員で動画を見ることで、技のコツに気付かせたり、良い点を共有したりする。

(4) 授業提供

第5・6学年 体育科学習指導略案			
		日時：5月30日(月)6校時 対象：場所：5・6年生9名・体育館 指導者：竹下、早田、山口、北川	
1	単元名 マット運動		
2	単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自分の力に合った基本的な動作ができる。【技能】</li> <li>○ 場の安全を確かめながら、進んで技に取り組むことができる。【態度】</li> <li>○ 技のコツを知るとともに、自分の課題を把握し解決の仕方を工夫することができる。【思考・判断】</li> </ul>	
3	指導計画		
時	学習内容	ICT	
1	オリエンテーション 自分のできる技を確かめよう。	○タブレットで自分の動きを撮影し、振り返る。	
2~4	技を決めて挑戦しよう。	○タブレットで示範となる動きを確認し、コツを見つける。 ○タブレットで自分の動きを撮影し、コマ送りしたり、静止画像にして動きを高めるポイントに気付く。	
5(本時)			
6	できるようになった技を発表しよう。 (技を組み合わせる。)	○タブレットで自分の動きを撮影し、みんなで見合うことでこれまでの練習の成果を味わう。	
4	ICT活用の意図	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 目指す動きを動画で確認することで、どのような技であるのかイメージを持てるようにする。(ア)(オ)</li> <li>○ 自分の動きを自分で見ることで、課題を確認することができるようにする。(イ)(カ)</li> <li>○ 友達の様子を撮影し、動き方について伝え合うことができるようにする。(ウ)</li> </ul>	
※ 下記の表のA~クに基づいて記述する。( )内に記号を記入する。			
教員によるICT活用(各教科の目標達成)		児童生徒によるICT活用(情報活用能力育成)	
ア	学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	オ 情報を収集したり選択したりするための活用	
イ	児童生徒一人一人の課題を明確にこころに定着させるための活用	カ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用	
ウ	分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や想像を深めたりするための活用	キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用	
エ	学習内容をまとめる際や児童生徒の学習の進捗を図るための活用	ク 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用	
5	本時(5/6)		
(1) 本時の目標			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の動きを見て、課題を見付けすることができる。</li> <li>・ 自分に合った技に挑戦することができる。</li> </ul>			
(2) 指導に当たって			
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 動きの課題を明確にするために、実際に応じて動きを見るポイントを焦点化する。</li> <li>○ タブレットで動きを確認することで、自分の動きや友達の動きをすくなく振り返り、課題やよいところを見付けお互いに話し合うことができるようにする。</li> </ul>			
(3) 実際 ※計算上の留意点(☆ICTを活用する場合について) ○その他の留意点(○について)			
過程	時間	主な学習活動	計算上の留意点
導入	10	1 準備運動 体づくり運動をする。 2 本時のめあてを確認する。	○ 体づくり運動では、支持する感覚を身に付けられる運動を行う。
展開	25	もつと上手に動くためのコツを見付け、技に挑戦しよう。	○ 全体でめあてを確認した後、グループごとに、動くときのポイントを確認する。
		3 技に挑戦する。 ↓ 動きを振り返り、課題を見付けたり、伝え合ったりする。(自分で・友達から) ↓ 再度、挑戦する。	☆ 撮影する際はタブレットを固定して、横から撮影させる。 ☆ 技を撮影後再生する際は、視線や体の傾斜(手、首、背中、足)など着目する部分で止め、動きを確認させる。
終末	10	4 できるようになった技を発表する。 5 本時の学習を振り返り、ワークシートに記入する。 6 次の学習に見通しや意欲をもつ。	☆ 撮った動画を大きなスクリーンに投影し、全員で確認できるようにする。 ○ これまでできるようになった技を組み合わせて、発表することを伝える。

(7) 授業検討

撮影したら直後に見ることができるので、自分の動きをすぐに確認することができ、課題に気づきやすかった。また、技の修正もすぐに行えるので技能の習得につながった。口頭で修正ポイントを伝えても体の動きをイメージすることが難しい児童が多いが、児童がタブレット端末を見ただけで、動きが分かるので、失敗してももう一度挑戦しようという意欲にもつながった。さらに ICT 機器だけではなく、技のチェックカードも併用したことでより課題を明確にすることができた。

一方で、児童がタブレット端末の使い方に慣れ、抵抗感をなくしておくことが求められる。今回は単元を通してタブレットを使用してきたので少しずつ児童同士で使えるようになってきたが、機器の準備、操作、撮影と見返す時間が長くなりすぎて、運動量の確保が難しい時間もあった。練習する時間とタブレットを用いる場面を区切って効果的な場面で使用していくことが求められる。

イ 授業Ⅱ (1年生体育「マット遊び」)

(7) 授業設計

授業Ⅱでは、授業Ⅰの授業をもとに、低学年での ICT 活用を検討する。低学年では、教師がタブレットでの動きを撮影し、個々で動きの振り返りを行う。本単元「マットあそび (B 器械・器具を使っての運動遊び)」では、色々な動きを通していろいろな転がり方やバランスなど多様な動きを経験したり、身につけたりできるようにする活動であることから、動きを大型スクリーンで繰り返し提示して共通理解したり、動きのポイントが分かるように学習カードを併用し見比べるようにし、児童が身体の動きをイメージできるようにする。そして、動きの遊びの動きができたならシールを貼ることで達成感が持てるようにする。

また、学習での基本的なルールや遊びで行う動きの名前やイラストをボードに掲示することで、素早く確認できるようにする。1年生にとって、体育では初めての ICT を使った授業なので、タブレットで撮影した動きの全員で振り返りを行い、自分の動きの良い点や課題点に気付けるようにする。

(4) 授業提供

第1学年 体育科学習指導案		
		日 時 平成28年11月8日(火) 3校時 場 所 体 育 館 対 象 1 年 1 組 2 組 指導者 川 畑 ・ 伊 勢 ・ 八 反 丸
1 単元名 マットあそび (B 器械・器具を使っての運動遊び)		
2 ICT 機器の活用の意図		
<ul style="list-style-type: none"> <li>手の付き方や体の動かし方、動きのポイントを確認できるようにする。…ア・イ・ウ</li> <li>自分や友達の身体の動きを振り返る。…ア・イ・ウ・ク</li> </ul>		
教員による ICT 活用 (各教科の目標達成)		児童生徒による ICT 活用 (情報活用能力育成)
ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用	ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用
エ 学習内容をまとめる際、児童生徒の知識の定着を図るための活用		
オ 情報を収集したり選択したりするための活用		カ 自分の考えを文頭こまめたり、調べたことを表や図こまめたりするための活用
キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用		ク 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用
3 本時 (4/7)		
(1) 全体の目標		
【関心・意欲・態度】友達と協力して準備をしたり、順番よく並んだりして仲良く遊ぶことができる。		
【思考・判断】タブレットや友達の動きを見て、動きを真似して前転がりなどの色々な転がりを工夫することができる。		
【技能】いろいろな転がり方に楽しく取り組むことができる。		
(2) ICT を用いての支援について		
○ 技能については、いろいろな転がり方の運動感覚が身につくように、タブレットや大型スクリーンを使い、手の付き方や体の動かし方を視覚的に確認し言語化しながら、楽しく取り組む。		
○ 態度については、大型スクリーンに動きを提示することで動きのイメージをもたせる。		
○ 思考・判断については、タブレットで動きを撮影し、動きを振り返る時間を設定する。自分の動きと学習カードの動きのポイントとの違いや友達の良い動きとの違いを比べる。		
(3) 指導過程 (指導上の留意点☆は ICT 活用において、△はその他の留意点について)		
過程	主な学習活動	指導上の留意点
導入 15分	<ul style="list-style-type: none"> <li>マットの準備と体力づくりを行う。</li> <li>1 始めのあいさつ</li> <li>2 準備運動・いろいろな動きに取り組む。</li> <li>個々で行う「どうぶつあそび」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達と協力して準備をすることやマットの持ち方、配置等は事前に指導をし、紙で提示する。</li> <li>☆ 苦手な動き等は、動画を見て動きのポイントを確認し、気を付けることを確認する。</li> </ul>
展開 20分	<ul style="list-style-type: none"> <li>3 今日の活動を知る。</li> <li>・ 約束の確認をする。</li> <li>「順番を守ること」「始まり・終わりの合図をする」</li> <li>・ めあての提示</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">                     いろいろなころがりかたにちょうせんしょう。                 </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 動きをスクリーンで紹介をする。</li> <li>ゆりかご・だるまわり・まるたまわり・まえころがり</li> <li>4 「ころがりあそび」</li> <li>(1) それぞれのグループで練習に取り組む。</li> <li>(2) タブレットで動きを撮影し確認を行う。</li> <li>・ 動きのポイントや友達の良い点を見つける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ スクリーンを見て今日する動きとポイントを確認して、児童が動きにイメージを持てるようにする。</li> <li>・ へそを見る意識で持ちやすいようにへそにシールを貼ってポイントを確認する。</li> <li>☆ タブレットを使い動きを撮影し、児童と動きの確認を行う。</li> <li>☆ グループでタブレットの動きを一緒に確認を行い、友達の良い動きを見つけられるようにする。</li> <li>・ タブレットで確認したポイントを確認しながら動きができるように声掛けをする。</li> <li>・ 学習カードを使い、できた動きは、友達に評価してもらいできた動きにシールを貼る。</li> </ul>
終末 10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>5 学習を振り返る。</li> <li>6 次回の予告・終わりのあいさつ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 次回の予告を行い、次回への意欲を高められるようにする。</li> <li>・ ルールを守って、後片付けをする。</li> </ul>

#### (ウ) 授業検討

タブレットを使い、動きの確認や振り返りをする中で、学習へ興味・関心が高まり集中して画面を見ている姿が見られた。また、学習カードと大型スクリーンを併用し、学習する動きを確認することで動きのポイントを理解し、意欲的に身体を動かそうと取り組むことができた。そして、常に提示するものとして、約束カードを常に提示して、繰り返し確認することで、児童がルールを意識しながら活動できた。

一方、課題として運動量の確保が挙げられた。日常での運動経験が少ないため、「手で支える」や「体を丸くして転がる」などの基本的な動きが身につけていない児童が多かった。そのため、動きをタブレットで確認しても動きの違いが分からずに逆に身体の使い方が分からなくなる児童もいた。今回の授業を通して、1年生にとってタブレットで動きを振り返る時間も大切だが、運動量を増やすことで多様な運動経験し児童の身体を動かしたいという意欲を高めたり、友達の動きを見て真似をしたりしながら楽しく運動遊びをすることが必要であることを感じた。

低学年の体育では、教師によるICT活用を中心とし、大型スクリーンを使っての導入での動きの確認やタブレットを使っての振り返りの時間を中心に行い、児童がタブレットで動きを振り返り良かった点や課題点を発表することで活用することが有効であると考えられ、低学年段階では他の教科学習で様々な児童によるICT活用を経験してから体育で活用するようにしたい。

#### ウ 成果と課題

##### (ア) 成果

- ・ 上学年・下学年共通して、タブレットだけでなく、個人の技のチェックカードや共通のイラストボードを活用することで、課題を明確にすることができ、動きのイメージを持ちやすくなり、タブレットで動きを振り返る際に効果的であった。
- ・ 今年度から設置された体育館ステージ横にある大型スクリーンとタブレットをつなげ、児童が撮影した動画や事前に準備した動画を見せることで、課題を共有できたり、イラスト以上に動きをイメージしやすくなったりした。
- ・ 児童による活用では、タブレットを活用すること自分たちで積極的に動きを撮影し、自分たちの動きを振り返えようとする意欲につながることができた。また、繰り返し機器を使用することで、使い方も慣れ、準備や撮影の時間が減り、素早く活用できるようになっていた。
- ・ 高学年においては、資料等で技の確認をし、動画で動きを確認することで、技のポイントを理解し、改善し、技に取り組むことができた。

##### (イ) 課題

- ・ 児童による活用においては、高学年では効果的に活用が図れたものの、低学年ではタブレットを使用し、個人で動きを振り返り、技の改善まで活用することができなかった。原因として、低学年では、体力テストの結果等からも、運動経験が少なく、全身を使ってのいろいろな運動遊びを通して多様な身体の動きを経験する必要がある。また、低学年児童にとっては、まだタブレットで動きを振り返るよりも操作する楽しみが中心になってしまった。動きを振り返る活動については、低学年では、体育では、教師による活用を中心に大型スクリーン等で全員で動きを振り返る時間を設定し、高学年で、児童による活用に積極的にタブレットで振り返るようにしたい。
- ・ ICT機器を使用し、撮影して自分の技を見返すため、振り返る時間が長くなり運動量の確保が難しいという課題が挙げられた。高学年においては、見返すことで技が修正でき技術の習得にもつながったことから必要な時間ではあるが、児童同士で使うことで、相談をして時間をさらにかけてしまう姿も見られたので、練習する時間と振り替える時間をメリハリをつけて、授業を展開する必要がある。
- ・ 体育館などの屋内での活動では、タブレット等で素早く撮影し、ICT活用をすることができた。一方で屋外では、タブレットでの撮影はできるが、画面の大きさや撮影時の太陽の位置などの関係からうまく活用することができなかった。見える校内放送などに撮影した動画を移し、休み時間を活用しての全員での動きの振り返りや始業時に玄関前の見える校内放送を活用しての動きを確認することで、共通理解を図りたい。

(3) 生活単元学習グループ

ア 授業 I

(7) 授業設計

昨年度の ICT 機器を使用した授業において、教師と児童の双方が、ICT 機器でできることを理解し、その活用に慣れることが課題として残った。そこで、今年度は、指導計画に児童と教師が共に ICT 機器を使用する学習活動を位置づけ、効果的な ICT 機器の活用について研究を行った。

ICT 機器を効果的な使用方法することで、学習の導入や事前指導での日程等説明、児童の注視を促す視覚的な情報提供、児童の学習への興味・関心を高め、自ら学習し分かったことを友達と共有し、学習をさらに深める活動などを目標とした。

本単元「こうえんであそぼう」では、生活単元学習本来の目標である「児童一人一人が主体的に学習し、体験や活動を繰り返す中で成就感や達成感をもつことができる」学習内容を中心に設定した。言語活動としては、「公園」「遊び」「交通安全」「地図」などのキーワードの理解やそれらの言葉を使った説明や感想などの基本的な表現活動の定着を図りたい。また、計画作りでの話し合い活動や説明に必要な情報を収集し、友達と協力してまとめる力を育成したい。主体的な活動を認め、公園での楽しい遊び方を促し、社会的なルールの遵守の大切さにも気付かせたい。

ICT 機器の活用する中では、必要な情報を視覚的に示し児童の気付きやつぶやきを引き出し、学習内容の理解を深めたい。さらに児童達が自分で情報を収集するデジタルカメラ等の機器を使用できるようにすることで、道順や学校周辺の様子に興味を持たせたい。また、安全やマナーなど社会的なルールの学習にも画像等の実際の様子を活用し、生活の中で意識し生かせるようにしたい。

(4) 授業提案・授業参観

生活単元学習指導案			
日		時：平成28年5月25日（水）3・4校時	
対象・場所		3・4・5・6年2組 5人・リズム室	
指導者		山口、下益、下家、北川	
1 単元名 「こうえんであそぼう」			
2 ICT機器活用の意図			
・ 「こうえんであそぼう」の目録や場所、持ち物などの確認をする事前学習でイメージをもたせやすくする。・・・(ア)・(ウ)			
・ 公園での遊びの選択やその方法を考える情報の提供を行う。・・・(イ)			
・ 地図作りや学校周辺の様子、危険箇所などの情報収集を進んで行う。・・・(オ)・(カ)			
※ 下記の表のア～クの視点に基づいて記述する。( ) 内に記号を記入する。			
教員によるICT活用（各教科の目標達成）		児童生徒によるICT活用（情報活用能力育成）	
ア	学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	オ	情報を収集したりするための活用
イ	児童生徒一人一人に課題を明確に突きまさせるための活用	カ	自分の考え方を文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用
ウ	分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用	キ	分かりやすく発表したり表現したりするための活用
エ	学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用	ク	繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用
3 本時（8・9 / 16）			
(1) 本時の目標			
・ 公園や道順を地図に表して、交通安全や周辺の町の様子を確認することができる。			
・ 地図作りをすることで、学習への見通しや活動への意欲を持つことができる。			
(2) 指導に当たって			
○ デジタルカメラやタブレット、大型モニターなど ICT 機器を使用することで、事物へのイメージをもちやすくし、言語活動を活発にできるようにする。			
○ デジタルカメラやタブレットを実際に使って基本的な操作方法に慣れ、興味・関心のある事物を挿入し地図を作成することで、学習への意欲をもたせる。			
(3) 実際 ※指導上の留意点（☆ ICT を活用する場合について ・ その他の留意点について）			
過程	時間	主な学習活動	指導上の留意点
導入	5	1 本時のめあてを確認する。 [必ずつくろう]	☆ 前時の活動を画像を活用し、本時への意欲付けをする。
展開	70分	2 「えいもんこうえん」の地図を作る。 ・ タブレットで写真を挿入して地図をつくる。 ・ 印刷する。	☆ 栄門公園の施設等の位置を画像を手がかりに思い出し、地図の制作に意欲をもたせる。 ☆ 自分のフォルダーの中から、画像を選択し地図を作成することで、学習への意欲をもたせる。
		3 学校周辺の地図を作る。 ・ 道順に沿って交通標識や建物など挿入し、印刷する。	☆ できあがった地図を見ながら道順のイメージをもたせる。
結末	10	4 次時の学習を確認し、公園での楽しい遊びに期待感を持たせる。	☆ 次時は、買い物学習について学習することを知らせる。

(7) 授業検討

授業者から「単元を通してタブレットPCや電子黒板を児童が使用し、自分が撮影した写真を使うこと

で児童のやる気が出ていた」「児童の ICT 機器の操作方法が身に付き、何をどうしたいか分かって活動できていた」という反省があった。ICT 機器を操作できることが、児童個々の授業への興味・関心を高め、一人一人が考える活動につながったと考える。

一方、機器を与えられただけでは思考力や創造性まで高めることは難しく、児童によっては、必要以上の情報を得ることで注意散漫になってしまい、本来の課題を達成することができなかつた。そのため、操作性の面白さにとどまらずに、作成した資料の活用の仕方や友達同士での話し合い活動、機器を使つての発表の機会を授業の中に取り入れるよう改善が必要である。思考力や創造性を育てるような活用方法について検討が必要である。

イ 授業

(7) 授業設計

授業を受けて思考力や創造性を高めるための児童の ICT 機器の活用のあり方をさらに深めることにした。デジタルカメラ等の正しい操作の理解、作成した画像資料の活用、児童間での相互評価や発表の機会設定などを充実した取組を行うことにした。

本単元「お楽しみ会をしよう」では、昨年度まで別単元であった「買い物学習」を合わせた指導計画を作成した。お楽しみ会で必要な飾りやプレゼントを作成する学習の中に「買い物学習」を位置づけ、児童の話し合い活動や校外学習での資料活用や発表等において ICT 機器を活用することにした。

「買い物学習」における事前事後学習でのプレゼンテーションによる日程説明等に加え、デジタルカメラ等の画像資料を直接メディアボックスに接続し話し合ったり、児童の撮影した画像を活用した作品作りをしたりすることでより視覚情報を活用した学習が展開できると考えた。

(4) 授業提案・授業参観

生活単元学習指導略案											
<p>日 時：平成28年12月20日(火)3・4校時            対 象：小学部重複障害学級 3,4,5,6年2組            場 所：パソコン室            指導者：北川・山口・下家・下益</p>											
1 単元名	「お楽しみ会をしよう」										
2 ICT活用の意図	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童の関心の高いICT機器を使うことで、学習意欲を高め、課題意識をもつことができるようにする。(ア、イ)</li> <li>見つけた情報を記録したり、表現したりする手段として活用する。(オ、カ)</li> </ul> <p>※ 下記の表のア～クの視点に基づいて記述する。( ) 内に記号を記入する。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>教員による ICT 活用 (各教科の目標達成)</th> <th>児童生徒による ICT 活用 (情報活用能力育成)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用</td> <td>オ 情報を収集したり選択したりするための活用</td> </tr> <tr> <td>イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用</td> <td>カ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用</td> </tr> <tr> <td>ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用</td> <td>キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用</td> </tr> <tr> <td>エ 学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用</td> <td>ク 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用</td> </tr> </tbody> </table>	教員による ICT 活用 (各教科の目標達成)	児童生徒による ICT 活用 (情報活用能力育成)	ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	オ 情報を収集したり選択したりするための活用	イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用	カ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用	ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用	キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用	エ 学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用	ク 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用
教員による ICT 活用 (各教科の目標達成)	児童生徒による ICT 活用 (情報活用能力育成)										
ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	オ 情報を収集したり選択したりするための活用										
イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用	カ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用										
ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用	キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用										
エ 学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用	ク 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用										
3 本 時 (12・13/15)											
(1) 本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分で撮影した冬の樹の写真を使って、お楽しみ会の飾りを作ることができる。</li> </ul>										
(2) 指導に当たって	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 手順を視覚的に提示することで、自分で手順を確認しながら活動を進めることができるようにする。</li> </ul>										
(3) 実 際 ※指導上の留意点 (☆ICTを活用する場合について ・その他の留意点について)											
過程	時間	主な学習活動	指導上の留意点								
導入	15	1 前時の学習を振り返る。 2 本時のめあてを確認する。 自分で撮った写真を使って、お楽しみ会の飾りを作ろう！	☆ 前時の校外学習の様子を写真を使って振り返りをする中で、活動を想起しやすいようにする。 ☆ デジタルカメラを使って自分で撮った画像を使用することで、学習意欲を高めるとともに、前時の学習の成果も確認できるようにする。								
展開	60	3 作り方の説明を聞く。 4 手順に沿って、一斉に操作をする。 5 自分で飾りをつくる。	☆ 手順を写真や文字の視覚的情報を用いて説明をすることで、キーワードを手掛かりに自分で活動を進められるようにする。 ☆ 具体的な操作を繰り返すことで、操作に慣れるとともに、関係する言葉にも親しむことができるようにする。								
終末	15	6 作った飾りについて発表する。 7 次時の予告をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>各自で操作を進める過程で、互いに声を掛け合って活動を進められるようにする。</li> <li>作り上げた飾りを互いに鑑賞し、成果を発表したり賞賛したりできるようにする。</li> </ul>								

#### (9) 授業検討

「お楽しみ会をしよう」という目的の下、デジタルカメラやパソコンを活用して、意欲的に活動を行うことができた。児童のとらえ方も記憶媒体を使うことで、鮮明に視覚的情報として残り、事後学習に描く絵や文章とは違う児童の課題意識の把握にも有効であった。校外学習では、写真撮影・買い物と時間をわけたり、途中の写真撮影の様子を適宜確認したりする必要があったことは反省点であるが、ICT機器の活用を通して、児童の興味・関心が高まり、余暇活動の広がりにもつながったと考える。

#### ウ 成果と課題

##### (7) 成果

- ・ 学習の導入や事前指導での日程等説明場面での ICT 活用について  
口話や手話での説明に加えて、ICT 機器を用いて情報を整理して提示したり、画像や動画等で言葉のイメージを明確に伝えたりすることができた。学習計画や方法、手段などの説明や準備する物、注意事項等の確認には効果的であった。
- ・ 児童の注視を促す視覚的な情報提供について  
授業において、学校周辺の地図の作成という難易度の高い学習において、児童自らデジタルカメラで写した建物や標識等を活用することができた。また、タブレットやタッチパネルモニターの操作では、実際に画像を取り込んで地図上に貼り付ける作業に、予想以上に意欲的に取り組む姿が見られた。
- ・ 児童の学習への興味・関心を高め、自ら学習し、分かったことを友達と共有し、学習をさらに深める活動について  
これまで、買い物学習などの校外学習では、見たことや活動したことの記憶が曖昧になりがちで、活動の経過を振り返ったり思い出をまとめたりすることが難しかった。  
授業では、デジタルカメラを使って、児童一人一人が街の風景や商店の様子に着目し、自由に記録することができた。映し出された画像には、児童によっていろいろな視点での課題解決があり、教師が意味づけをしなくてもその良さを友達同士で共有し、賞賛し合うことができた。さらに、画像を使った作品作りでは、意欲的に手作業による様々な工夫を加える姿が見られた。
- ・ ICT 機器を意図的に活用する時間の設定について  
日頃、なかなか触れることのない ICT 機器を、意図的に生活単元学習で活用する時間を設定することで、児童の興味・関心が高まってきている。将来の余暇活動への広がりにも、期待がもてる。

##### (8) 課題

- ・ タブレットやコンピュータ等機器や無線 LAN の接続などハード面でのトラブルで、授業の進行を遅らせてしまうことがあった。また、現在の生徒用タブレットの操作は、繊細な技術を要するため小学生には難しい作業となった。
- ・ 特に、デジタルカメラの使用に制限があるため、SD カードの使用や画像の保存は、教師主導で行わなければならない。
- ・ 単元によっては、ICT 機器の活用が必ずしも有効とは限らないが、継続的に学習活動に取り入れていくために、年間指導計画への位置づけをしておきたい。
- ・ 児童が ICT 機器を使った学習を行う場面では、使用についての説明が必要である。また、校外学習等でのデジタルカメラ等の操作については、操作する場面と観察等の学習を分けて、学習活動をしっかり意識づける必要もある。単に、ICT 機器等の操作の面白さだけに終わらないよう配慮していきたい。
- ・ 今後は、生活単元学習と各教科等や言語活動との関連性を深めるためにも、ICT 機器の基礎的な技術習得やリテラシーについての学習を取り入れていく必要がある。

#### (4) 研究の成果と課題

##### ア 成果

本年度、授業設計段階での ICT 活用の視点における「児童生徒による ICT 活用」を授業の観点に取り入れ授業を行うことで、「分かりやすく発表する」「知識の定着をはかる」などの視点を中心に授業を実施してきた。今年度はタブレットを中心に活用した実践を行うことができた。タブレットはその他の ICT 機器に比べ、持ち運びが容易で、児童それぞれで操作しやすく、視覚的な情報を獲得しやすい機器であるため、授業に積極的に取り入れやすいと機器だと考えられる。また、今年度の研究を通して、タブレットの活用時には、活用の意図や学習の目的を紙などで視覚的に提示し、理解できるように配慮することで、教師の

指示がなくても課題解決や情報共有のための手段としてより効果的に活用できるのではないかと考えられる。

また、フラッシュ教材としての活用では、繰り返し計算や語句の確認ができるだけでなく、児童の実態や能力に応じて補充問題等にも取り組めることができるので、個々に応じた指導にも ICT 活用が効果的に活用できると考える。

#### イ 課題

今年度の ICT 活用の実践を行うことで2点大きく課題が挙げられた。一つ目が、教材作成に当たっての教師の負担である。これまで、授業を行うにあたり、使用するフラッシュ計算や教材を、児童の実態や能力に応じて教師ごとに作成してきた。児童がスムーズに操作できるように課題を作成することは教師自身が ICT 活用を行う以上に事前の準備が必要であった。今後、教師の負担を減らすためには、繰り返し活用できるフラッシュ計算や單元ごとに活用した教材等をデータ等で共有できるようし、教師の負担も減らし、より効果的に ICT 活用に取り組む必要があると考える。

二つ目は、授業で ICT 活用を行うにあたり、「児童による ICT 活用」と「教師による ICT 活用」のどちらが効果的であるかを検討する必要がある。今年度の研究を通して、児童による ICT 活用について取り組んできたが、教科の單元によっては、児童が ICT を有効に活用できる活動と活用が難しい活動があった。また、同じ單元でも学年により、児童の ICT 活用に効果が見られる学年、効果が見られない学年が見られたりした。児童の実態や発達段階によってどのような ICT 活用を行うことが分かる授業につながるのか検討が必要である。

## 6 平成29年度の学部研修

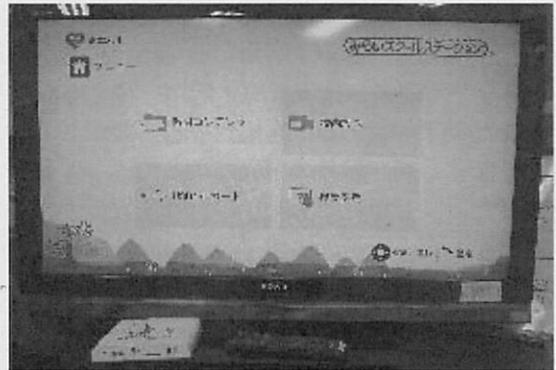
これまで二年間の実践を通して、多くの成果と課題が挙げられた。今年度は研究の最終年であることから、より積極的にICT活用を図るために、各自で各学年の教科を選択し、ICT活用をした授業実践を行い「分かる授業」に取り組んだ。また、これまでの研修で課題として挙げられたICT活用を行うにあたっての教師の教材準備の負担を減らすための環境作りにも取り組んだ。

### (1) 各学年の教科でのICT活用の実践に向けて

#### ア 「見える校内放送」を活用したICT活用環境作り

昨年度までの実践では、1回ごとの授業でICTを活用した教材を作り、次年度への引き継ぎを十分に行ってこなかった。そのため、授業実施時に一から教材作成を行っており、教材準備等に時間がかかってしまうという課題があった。このことから、今年度は、「見える校内放送」(写真1)を活用し、各学年・教科で作成した教材等の蓄積と作成した教材を共有することで教師の授業準備の軽減への環境作りに取り組んだ。

なお、本校の「見える校内放送」はすべての教室のテレビにメディアボックス接続・配置されている。このメディアボックスは学校の無線LANで各職員のパソコンとつながっており、専用フォルダに作成したワードやパワーポイント、写真等を保存することで、各教室でチャンネル操作のみで自由に閲覧できるようになっている。



(写真1) 見える校内放送とメディアボックス

#### イ 授業設計にあたって

これまでの授業設計では、「授業設計段階でのICT活用の視点」から授業全体を通しての指導案を作成し、班の共通理解や提供授業を行った。今年度は、各自での授業実践と授業準備の負担を減らし、教材作成の時間の確保するためにICT活用に焦点を当てた指導略案(資料3)を作成した。指導略案では、教科と単元から「本時の目標」を立て、「ICT活用の意図」を「授業設計段階でのICT活用の視点」から選択し、活用場面のみ学習展開を記入する。授業後にはICT活用の場面を振り返り、次の授業に向けて評価・改善ができるようにした。提出した指導略案はPDFにまとめて一覧共有する。共有することで教科・単元でどのようなICTが活用されているか「見える校内放送」どのような教材が保存されているのかなどを参考にできるようにした。

(資料3) ICT活用指導略案

○ ICT活用 指導略案		
学年	教科	単元
単元目標 (本時 / )		
活用機器	ねらい	
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)	ICT機器・教材等
導入 展開 まとめ		
授業の 振り返り		
① 教員によるICT活用 ◎ 各教科の目標達成		② 児童生徒によるICT活用 ◎ 児童生徒の情報活用能力育成
・ 教員自身が、下記の視点でコンピュータやプロジェクトなどを活用して効果的な提示などを行う場合		・ 児童生徒に、下記の視点でICTを活用させ課題を解決させる場合
ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用	イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用	ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用
エ 学習内容をまとめる際、児童生徒の知識の定着を図るための活用		オ 情報を収集したり選択したりするための活用
		カ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用
		キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用
		ク 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用

(2) ICT活用の実践 (指導略案の一部)

○ 国語 (2年生・5年生)

○ ICT活用 指導略案		
学年	2	教科 国語
単元	かん字のひろは	
単元目標 (本時 2/2)	・1年生に同じように漢字を文中で正しく使うことができる。 ・ひらがなの「は」をよみ文の中で正しく使うことができる。	
活用機器	書画カメラ	ねらい (ア)・(キ)
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)	ICT機器・教材等
導入 展開 まとめ	30 ・1-1に書いた文を発表する。(1-1を画面に写す。)	書画カメラ
授業の振り返り	・発表の際に「画面を見ながら言うので、口形を見せながら手紙を書くので、100%正しく伝えられた。また画面で同じ「は」を書いているか、みんな確認できた。	

○ ICT活用 指導略案		
学年	2年	教科 国語
単元	ともこまはとこまは	
単元目標 (本時 1/4)	・話の内容に興味をもつ。大事なところを声に出して読むことができる。	
活用機器	見える校内放送	ねらい ア・ウ
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)	ICT機器・教材等
導入 展開 まとめ	35 ・さいたお知らせ文を音読し内容をよみ取っているか確認する。 ・初めにあった言葉(印をつけて)に注目し共通点を見つける。	見える校内放送
授業の振り返り	・教師が読んだ内容を聞いて確認し、自分たちがよみ取った内容を確認できた。また年令や服(色や形)を色分けすることで、授業の話の中から共通点を見つけ出し確認できた。	

○ ICT活用 指導略案		
学年	5	教科 国語
単元	敬語	
単元目標 (本時 2/2)	敬語の種類について知り、正しい敬語を使うことができる。	
活用機器	見える校内放送 (powerpoint)	ねらい 工
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)	ICT機器・教材等
導入 展開 まとめ	10 補欠問題をデータで作成しておき、児童の個別指導としている。問答の時間中にゲーム感覚で解けるようにする。間違えたりすることを知覚の定着がていどできるようになる。	見える校内放送
授業の振り返り	早く自分の問題を解き終わった児童に補欠問題として与え、解くことができた。個別指導に活用することもできた。	

○ 社会 (6年生)

○ ICT活用 指導略案		
学年	6年	教科 社会
単元	日本の歴史 (全)	
単元目標 (本時 1)	時代ごとの主な人物、出来事などについて知り、歴史学習への興味をもつ。	
活用機器	タブレットPC	ねらい ア・ウ・ク
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)	ICT機器・教材等
導入 展開 まとめ	5 ・各単元(時代)の終末に人物や出来事について、フリッシュ形式の動画で振り返る。問題や答えの選択を児童に行わせる。	タブレットPC
授業の振り返り	・知識の定着、理解の深化につながった。 ・機器の準備・操作・片づけなど一連の扱い方の向上につながった。	

○ 算数 (2年生・4年生・5年生)

○ ICT活用 指導略案

学年	2年	教科	算数	単元	ひき算のひき算
単元目標 (本時 2)	・ 繰り下りのある筆算(2位数-2位数)の練習ができる。 ・ 差が1位数になる筆算の(かたを考える)ことが出来る。				
活用機器	タブレットPC		ねらい (ア) (イ) (ウ)		
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)				ICT機器・教材等
導入 展開 まとめ	15	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 前時学習(ひき算の(かたを)出し、正しく筆算で計算することが出来る。</li> <li>○ 各自タブレットで1問ずつ筆算して、言葉で説明することが出来る。</li> </ul>			タブレットPC
授業の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「くり下が」を意識させる書き込み(色をかえる)などすることで集中してTVを見ることができた。みんな</li> <li>○ TVで自分のタブレットで解いた問題を見て、解き方を説明することができた。みんな</li> </ul>				

○ ICT活用 指導略案

学年	2年	教科	算数	単元	かけ算(2)
単元目標 (本時 2/15)	九九の呼び名を知り、口唱えることが出来る。				
活用機器	iPad 9x9カードアプリ		ねらい ア エ ク		
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)				ICT機器・教材等
導入 展開 まとめ	17分 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>九九カードでかけざん九九を覚えているかを確認する。</li> <li>ランダムに表示し、1~9の段の定着を確認する。</li> </ul>			iPad.
授業の振り返り	iPadを使用することで児童の意欲が高まった。ゲーム形式で楽しく九九を覚えることが出来る。				

○ ICT活用 指導略案

学年	5	教科	算数	単元	図形の角
単元目標 (本時 1/7)	・ 三角形の内角の和は180°であることを理解する。				
活用機器	PC (教科書対応ソフト)		ねらい I		
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)				ICT機器・教材等
導入 展開 まとめ	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ SAで操作を行い、セパて並べる。(2つあるなどを行う。</li> <li>・ 全体でふり返りをするときにアニメーションで180°になる様子を見せる。</li> </ul>			PC (教科書対応ソフト)
授業の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 操作活動で児童の考えを話し出した後にアニメーションを見て確認することができた。</li> <li>・ 動かすアニメーションのため、それに合わせて先生の説明ができた。</li> </ul>				

○ ICT活用 指導略案

学年	2	教科	算数	単元	時と時刻
単元目標 (本時 2/15)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生活体験をもとに、1日の時刻を量としてつかえる。</li> <li>・ 「午前」「午後」をついて時刻の表すことが出来る。</li> </ul>				
活用機器	スツールプレゼンター		ねらい (ア) (イ) (ウ)		
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)				ICT機器・教材等
導入 展開 まとめ	30	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 起床から寝るまでの行動を「午前」「午後」をついて時刻で表す。</li> <li>・ 1日の午前0時から12時、午後12時から12時までの時刻があることを知る。</li> </ul>			スツール
授業の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 24時間時計を見て、その時刻に行ける(している)ことを生活体験をもとに話し出した。</li> <li>・ 1日の流れを「午前」「午後」について整理して話すことができた。</li> </ul>				

○ ICT活用 指導略案		
学年	教科 算数	単元 商が279・379になるわり算
単元目標 (本時 / )		
活用機器	パソコン・小学校算数ソフト教材 <sup>ねらい</sup> 商が279・379になるわり算	
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)	ICT機器・教材等
導入 展開 まとめ	筆算 <del>練習</del> をお際に半具体物を動かしながら、理解させる。	教科書添付の教材集
授業の 振り返り	目の前で、半具体物が動き、イメージを持たせやすい。	

○ 理科

○ ICT活用 指導略案			
学年	5	教科 理科	単元 魚のたんじょう
単元目標 (本時 7 / 11)	魚の卵と子どもの誕生に興味を持ち、飼育を通じて卵からメダカになるまでを観察させる。また、魚は水の中の小さな生き物を食べていることがわかる。		
活用機器	大型テレビ	ねらい ア ウ オ キ	
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)	ICT機器・教材等	
導入	10分	メダカなどの魚は、水の中の何を食べて生きているかかんがえさせる。顕微鏡を使って、水槽の水の様子を調べる。	
展開 まとめ	35分	実物投影機に顕微鏡アダプタを接続し、大型テレビにその様子を映し出し、水の中の小さな生き物を観察する。	
授業の 振り返り	顕微鏡で観察した水の中の小さな生き物を、拡大することで形や動きの特徴を捉えることができる。ピント合わせに時間がかかってしまった。		

○ ICT活用 指導略案			
学年	6	教科 理科	単元 植物のからだのはたらき
単元目標 (本時 3 / 7)	根からとり入れた水は、植物のからだのどこを通過して、全体に運ばれるのだろうか。		
活用機器	デジタルカメラ パソコン 大型テレビ	ねらい 植物の体の水の通り道や、運ばれた水の行方の実験を振り返り、取り入れられた水が、体全体に運ばれ葉から蒸散されることを記録した様子を見て確認する。	
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)	ICT機器・教材等	
導入	10分	吸水実験や蒸散実験について、プレゼンテーションを見ながら振り返る。	
展開 まとめ	35分	根・茎・葉の特定の部分が染まったことに気づかせ、根から取り入れられた水が決まった部分を通して体全体に運ばれたことを確認する。 袋をかぶせたハウセンカの様子の変化を振り返り、根から取り入れられた水は、体全体に運ばれ葉から水蒸気として排出され、それを蒸散と表現することを確認する。	
授業の 振り返り	植物にとって、水は欠かすことができず、根から吸い上げられた水が、主に葉から水蒸気になって排出される。この根から吸水され葉から排出される仕組みによって、植物が生き続けられることに気づかせる。		

○ ICT活用 指導略案			
学年	4	教科 理科	単元 夏の星
単元目標 (本時 2 / 2)	星に興味を持ち、夏の星や星座の観察の仕方を知る。 星にはいろいろな明るさや色があることや星の集まりである星座を確認する。		
活用機器	パソコン 大型テレビ	ねらい ア ウ ク	
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)	ICT機器・教材等	
導入	10分	夏の夜空に見える星の明るさや色について、振り返りをする。	
展開 まとめ	35分	NHK-Forschoolの「夏の星たち」を視聴する。 はくちょう座、こと座、わし座、北極星、北斗七星などの星座を知り、星の明るさや色の違いを知る。 星の観察の方法をまとめる。	
授業の 振り返り	星座の学習は、実際に観察することが難しいので、NHK-Forschoolの番組を観ることで星の美しさを実感できたようだ。星への興味関心が深まった。		



○ 家庭 (5年生)

○ ICT活用 指導略案		
学年	5	教科 家庭
単元目標 (本時 2/18)	製作に必要な用具の安全な使い方がわかる。作品の形や色を工夫して小物の制作ができる。	
活用機器	タブレット	ねらい 玉の玉結び、ボタンつけの動画をくり返し視聴し、正しい方法を身に付ける。
学習の流れ(分)		
導入 (展開) まとめ	10	玉の玉結び、ボタンつけの動画を停止や巻き戻しを(何秒か)確認する。 正しい方法を
授業の 振り返り	停止や巻き戻しができるので、見学のペースに合わせてわからないところをくり返し学習することができた。	
		ICT機器・教材等 タブレット

○ 生活単元学習 (4~6年合同)

○ ICT活用 指導略案		
学年	4・5・6年組	教科 生単
単元目標 (本時 2/10)	公共の交通機関や施設の利用にマナーを覚えながら、見学、行動することが出来る。	
活用機器	教師用 パソコン	ねらい ア.イ.ウ
学習の流れ(分)		
導入 (展開) まとめ	10 70 10	・デジカメで撮影した画像を使ったパワーポイントを使用し、見学場所、注意事項について話し合う。
授業の 振り返り	・公共の交通機関(バス)でのバス停の場所の確認と歩行時(歩道の有無など)の注意点についてもストリートビューで行うことができた。	
		ICT機器・教材等 教師用パソコン パワーポイント デジタルマップ (ストリートビュー)

○ ICT活用 指導略案		
学年	4	教科 生活単元学習
単元目標 (本時 3/10)	自分の成長に関心をもち、その過程についてよこめて、発表をすることが出来る。	
活用機器	ipad, TV, HDMI	ねらい カ・キ
学習の流れ(分)		
導入 (展開) まとめ	10 30 5	・学習内容と、ipadの使い方を知る。(教師の作成したスライドを見て、どのような操作が、どのように操作するかを知る。) 写真と文章を入力、スライドを作る。
授業の 振り返り	・操作方法がシンプルで、児童でも制作しやすいため、マウスやタッチペンなど使用せず、指のみで操作できたこと、本学級の児童にとって良かったこと。	
		ICT機器・教材等 ipad (keynote)

○ 自立活動

○ ICT活用 指導略案		
学年	5年2組	教科 自活
単元目標 (本時 1)	思い出の文をパソコンでわかりやすい文にしてプリントアウトすることが出来る。	
活用機器	パソコン室の生徒機	ねらい カ キ
学習の流れ(分)		
導入 (展開) まとめ	45 5	・パソコンを正しく起動する。 ・濁音や仮音などの入力に気を付けて入力する。 ・資料に漢字を使った文になるようにする。
授業の 振り返り	・濁音や仮音の入力に、教師の支援をもらいながら取り進むことができた。 ・こぼれまが、つづいて書くことに、自分の気持ちで訂正して、おまじぎを渡す。文に表現しようとしている。	
		ICT機器・教材等 パソコン室の生徒機

○ 外国語活動

○ ICT活用 指導略案		
学年	6年	教科等 外国語活動 単元 I can swim.
単元目標 (本時)	積極的に友達に「できる」と尋ねたり、自分のことと答えに「しよう」とする。	
活用機器	PC, TV	ねらい 児童の興味関心を高め、知識の定着を図る。
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)	ICT機器・教材等
導入 展開 まとめ	5 ・スポーツの英語のフレーズ教材で、発音を聞いて模倣したり、絵を見て言ったりする。	PC, TV
授業の 振り返り	・外国のイラストが用いられている学習サイトなので、日本のものとの違いに児童は関心をもてた。	

○ 総合的な学習の時間

○ ICT活用 指導略案		
学年	4	教科 総合 単元 半成人式
単元目標 (本時 5/15)	今までの振り返り、家族へ感謝の気持ちを伝えよう。	
活用機器	PC, 校内放送	ねらい オカキ・
学習の流れ(分)	学習活動 (ICT機器の活用を中心に)	ICT機器・教材等
導入 展開 まとめ	・生まれた時や、七五三の時など、節目の写真をとりこむ。 ・パワーポイントで、思い出を振り返る、スライドを作る	パソコン、スライド
授業の 振り返り	・校内放送に入れ、家族の前で発表する。 ・「おきな」の宇話動画を流し、一緒に歌う。	校内放送 タブレット

(3) 研究の成果と課題

ア 成果

本年度は、大きく三つの成果が挙げられた。

まず一つ目に、これまでのグループでの実践を踏まえ、多くの ICT 活用を個々で実践することができた。特に、本年度は「児童による活用」として「カ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用」や「キ 分かりやすく発表したり表現したりするための活用」を合わせて行った実践が、標準学級・重複学級ともに行われた。iPad などにあるパワーポイントや Keynote を積極的に活用することで、児童がより簡単に自分の考えをまとめたり、相手に分かりやすく伝えるための手立てとして活用したりすることにつながることができた。

二つ目に、「見える校内放送」を活用した ICT 活用の環境作りに向けて、多くの教材を「見える校内放送」に保存することができ、来年度に向けて教材を共有化することができた。

多くの授業に取り組んだことで、教材を「見える校内放送」に蓄積することができた。その結果、次年度への教材の引き継ぎがスムーズになったと考える。標準学級では、授業で使った教材を、次年度へと年度をまたいで同学年で共有できるようになった。そして、重複障害学級では、教科学習においては、個々取り組んできた学習の段階がデータとして残せることから、スモールステップで学習が引き継ぎやすくなった。また、集団学習においては、これまで実践した授業の教材を、他の授業でも、見返すことができるので振り返りや授業での活用がしやすくなるというメリットも挙げられた。

三つ目に、ICT 活用に焦点を当てた指導略案を作成することで、教材作成への時間が多く確保でき、ICT 活用を取り入れた授業を多く実践することができた。また、ICT 活用の場面のみを記入することで、授業全体を通して ICT 活用をしなければという意識を減らすことができ、ICT が必要な場面に効果的に取り入れられる授業が増え、多くの教科・領域で幅広い ICT 活用の実践へとつながることができた。

また、指導略案のなかに「授業設計段階での ICT 活用の視点」と共に、授業の振り返りを記入することで、授業設計段階から、振り返りまで ICT 活用の視点に立ち、提示の仕方や活用方法が適切であったかな

どの振り返りをする事ができ、PDCA サイクルに沿った「分かる授業」作りにつなげることができたと考ええる。

#### イ 課題

課題として、大きく三点が挙げられた。

一つ目が、これまでの実践を踏まえ、「見える校内放送」内に、多くの ICT 活用の環境の充実を図ることができた。しかし、今年度は児童が在籍していない学年があったことや実践して作成した教材が教科によりばらつきがあった。このことから、今後も引き続き多くの授業を実践し、多くの授業での教材データベースへの教材の蓄積を図らなければいけないことが課題として挙げられた、来年度以降も、「見える校内放送」を積極的に活用し、多くの教材の蓄積を図っていききたい。

二つ目が、教材等を作る上での共通理解事項等を検討する必要があることが挙げられた。教材を作成する上で、教師により文字の色や書式、写真の大きさなどばらつきが見られた。このことから、今後より児童に分かりやすい ICT 活用を図るために、基本的な書式や教材等の配慮事項等の共通理解を図っていききたい。

三つ目に ICT を活用して工夫したり、考えをまとめたりする児童の活動をどのように評価するか、学部共通の評価の観点を検討する必要があることが挙げられる。これまでの研究を通して、教師による活用だけでなく、児童による活用にも取り組んできたが、児童が活用した際の評価の観点が教師ごとに違った。このことから発達段階や学年ごとの評価規準等を作成し、児童の活動の評価することができるようにしていきたい。

## 7 研究の成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

- ・ 授業において ICT 活用を積極的に行ったことで、教師の機器に対する抵抗感だけでなく、児童にとって、ICT 機器への興味・関心にとどまることなく、学びを深めるための道具として効果的に授業で活用できるようになり、積極的に授業に取り入れることができるようになった。
- ・ 児童が、低学年段階から ICT 機器に触れることで、操作能力が高まり、自分の考えや調べたことを相手に分かりやすく伝えようとする意識を高めることができた。
- ・ 「授業設計段階の ICT 活用の視点」8項目を意識した授業作りを行うことで、授業参観や授業検討の際に、視点を絞って議論することができ、研究を深めることができた。
- ・ 「見える校内放送」を活用することで、教師だけでなく、児童も休み時間等に自分たちで活用することができた。

### (2) 研究の成果

- ・ 今年度まで取り組んできた研修を今後もどのように、データの蓄積と共有化を図ればよいか。
- ・ 教師の教材作成だけでなく、タブレット PC と iPad 等のアプリを検討し、どのように活用していくか実践する必要がある。
- ・ 今後も個人での ICT 活用を図るだけでなく、全体での ICT 活用の実践発表や活用例の紹介等を図る必要がある。
- ・ 授業での ICT 活用を図ることができたが、実生活での児童による活用（メールやネット通販、お店の予約、福祉サービスの利用）などの将来を見据えた ICT 活用も行っていく必要がある。
- ・ 新学習指導要領の実施に向けて、教育課程にどのように ICT 活用を位置づけていくか検討の必要がある。

#### ～引用・参考資料～

- ・ 特別支援教育の実践情報 No.162 明治図書
- ・ 「授業が変わる！子どもの目が輝く！」実践事例集 鹿児島市立山下小学校
- ・ 「特別な教育ニーズと AT・ICT の活用」  
国立特別支援教育総合研究所 教育情報部 金森克浩・土井幸輝
- ・ 「これならできる！ICT 活用講座（初級編）」～デジタルコンテンツを活用した授業づくり～  
鹿児島県総合教育センター